
「雨隠の館」

幻月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「雨隠の館」

【Nコード】

N9940C

【作者名】

幻月

【あらすじ】

大学生になって初めての夏休み。さほど難しくなかった依頼を終えた帰り道に待っていた、不思議で恐い出来事。平次と和葉が主役のホラー風味のリレー小説です。ホラーコメディとして企画しましたが、書いているうちにシリアスに……。表現には気をつけていますが、途中で少しグロ系の表現があったりしますので、苦手な方はご注意ください。※『幻月』は、phantom(P)と月姫(M)のユニットです。主な管理は月姫が行いますので、どちらか一方にコメント・メッセージを送って下さる際には、文の初めに(P)又

は（M）を入れて下さいますよう、ご協力をお願いします。

第一話 | 平次 | (前書き)

この話は2人によるユニットでリレー小説です。途中、微エロやグロイ表現があったりします。苦手な方はご遠慮下さい。

第一話 | 平次 |

「とうとう降って来よったか……」

山を越えて少し下った所にあつた依頼人トコからの帰り道、ぽつと頬に当たった水滴にメットン中で呟いて、一瞬空を見上げてすぐに視線を戻した。

今バイク走らせとるんは車2台がやつと擦れ違える程度の曲りくねった狭い山道やから、氣い抜いたら即事故る。

オレ一人ならまだしも、後ろに和葉乗せとるから、いつも以上に慎重にカーブに入った。

——いつやったか、和葉乗つけたまんま犯人追っかけてジャンプかましたりとか無茶な運転したんは、ご愛嬌や。

頼むから、山降りるまで持ってくれ。

段々と大きくなる雨粒が道路を黒く染めてくのを見ながら、暗い空に祈る。

依頼人トコを出る前に携帯で見た天気予報やと降り出す前には寝屋川へ帰れるハズやったし、まだ4分の3は残っとるんや。

天気予報でメシ喰っとるんなら、きっちり仕事せんかいっ！鉄下駄送りつけたるかっ！？

胸ん中で気象予報士に悪態ついた時、いきなりバケツ引っくり返したんかっくらい雨足が強くなった。

叩きつけるような雨が、視界を遮る。

スピード落としてさっきよりももっと慎重に走ってみたんやけど、

これ以上は危険やと判断してバイクを路肩に止めた。

一応舗装されとは言うても所詮は田舎の山道やから、路面はボコボコやしガードレールもロクに付いとらん。

オマケに、今は下つとる最中。

こんなトコでコケたら崖下真つ逆さまで、奇跡でも起きん限りは6文握って三途の川で乗船待ちコース間違いなしや。

「平次……」

バイクから降りた和葉が、ハンドルを握ったオレの腕を不安そうに掴んで辺りを見回した。

同じ山道でももう少し車通りの多いトコなら途中にラブホの1軒もあるんやろうけど、周りに人家も見当たらん地元の間人しか使わんような所にそんな気の利いたモンあるハズもない。

田舎によくある屋根つきのバス停とか農家の納屋とか、そんな雨宿り出来そうなトコも勿論ない。

前に鳥取で道に迷った時は運良く依頼人の家の人に拾って貰えたけど、今回もそんな上手く車が通りかかるとは到底思えんし、天気予報と今の雲の様子からしてそうそう

簡単に雨が上がりそうもない。

「少し歩くで」

このまま雨に打たれて突っ立つとっても状況は好転せんやろうから、少しでも雨の凌げそうな所を探すためにバイクを押して歩き始めた。坂があんまりキツくないんが、不幸中の幸いや。

「もう一晩、泊まらせてもらえばよかったわ」

少しばかりバイクに引っ張られるように歩きながら、ため息まじりにボヤいた。

「なに？」

「もう一晩、泊まらせてもらえばよかったなて」

「せやけど、依頼終わったんにもう3日もお世話んってたし……」

雨の音とメットのせいで聞き取れんかったらしい。

ただの愚痴やったけど少し大きな声で繰り返したら、バイク押してるオレの邪魔にならんようにと後ろ歩いとる和葉が、どこか申し訳なさそうに返してきた。

今回の依頼が来たんは、10日前。

『3年前に亡くなった先代の遺言の謎を解いて欲しい』て依頼に、大学の長い夏休みをどうやって過ごそうかと考えとったオレは、一も二もなく飛びついた。

依頼人は代々続く地方の名家の当主で、封筒には先代の遺言は別荘に関する事やからそっちに来て欲しいて手紙と、別荘までの地図が入ってた。

別荘は古くからある避暑地にあるからよかったら暫く滞在してくれて添え書きに、依頼を受けるて連絡するついでに同行者がいてもいいかと訊くと、笑いながら快く応じてくれた。

いつも事件優先で、特にここ最近はデートのドタキャン連続記録更新中やったモンやから、和葉の機嫌はナナメどころかそろそろ180度近いんちゃうかってくらいレッドゾーンに突入しとって、さすがのオレもちよっとばかり焦った。

そんな中でのある意味都合のいい依頼に渡りに船と乗っかって、一

気に機嫌の回復した和葉を連れて依頼人の別荘に行った。

依頼人トコ行くんに車やなくてバイク選んだんも、その方が小回りがいてどこに出掛ける事なんでも便利やろうと思ったからや。

まあ、それが今回、裏目に出たんやけど。

今回の依頼は遺産相続でモメとるとか脅迫状が届いたとか、そんなきな臭い話やなかったから依頼人ものんびりしとって、連れてった和葉相手に自慢のコレクション披露したりしとった。

和葉も、奥さんが自分の若い頃の貸してくれたとかで、見るたんびに違うレトロな服着て楽しそうにしとったから、オレは心置きなく謎解きに集中した。

先代の遺言の謎はそう難しいモンやなかったからその日の夜には片付いて、そのまま世話んなりながら過ごす事3日。

いつまでいてくれてもええて言うてくれたけど、和葉が主もいない別荘で家政婦さんまで借りたままなんは気が引けるて言うし、それは確かにそうやなど、依頼人が自宅に戻るのに合わせてオレらも帰る事にした。

和葉が楽しめないんやったら別荘借りててもしゃあないし、天気の仕事は多少心配やったけど家に帰るまでは充分持つハズやったから。

「寒ないか？」

「ううん、アタシは平気やよ。平次こそ、大丈夫なん？」

「こんな雨でヤラれる程ヤワやないわ」

オレに気を使ってか平気そうに歩いてる和葉の唇が、少し白くなってる。

冬と違うて夏の雨はまだ耐えられるが、このままやったら確実に風

邪を引くやろう。

少しでもええから雨の凌げるトコを探そうと目を凝らして辺りを見回すと、木立の奥に小さく灯りが見えた。

依頼人の別荘に行くのにこの道を通った時には気付かなかったが、どうやら家があるらしい。

「和葉、あれ」

「え？」

「人がおるみたいや。雨宿りさせてもらお」

「せやけど……」

オレの指差した先を見て、和葉が安堵と戸惑いが混じったような複雑な声を上げた。

それも無理ないか。

ロクに道すらない、雨のせいだけやないやろう暗い林の奥の灯りなん、普段なら気付いてもスルーする。

せやけど、このまま歩いて集落まで出るなん無理やし、選り好みしとる余裕はない。

和葉もそれはわかつとるから、オレのジャケットの裾を掴んで大人しくついてきた。

「ホンマにここをお願いするん？」

獣道としか言いようなない道の行き止まりにあった家の前で、和葉が怯えたようにオレの後ろに隠れる。

オレも、未だ音を立てて降つとる雨の事を一瞬忘れた。

林の奥にあったんは、世話んなってた依頼人の別荘よりも大きな洋風の屋敷やった。

おそらく一枚板で作られとるんやろう重厚で大きな観音開きの玄関ドアや、一目で高価やとわかる手の込んだステンドグラスの嵌め込まれた明り取りの窓のある、まるで昔の華族の別邸みたいな由緒ありげな建物。

丁寧に手入れされとったらきつと文化財にでも指定されとるくらい立派な屋敷やけど、それだけに荒れ放題の前庭やペンキが剥げてささくれた壁や灯りは点いてるのに人気のない様子が、建物の立派さと相まって陰鬱で凄惨な、それでいて引き込まれそうな一種独特の雰囲気醸し出しとった。

「平次い……」

背中に張り付いとる和葉が震えとるんがわかる。

多分これは怖いとかの感情だけやなくて、雨で体温を奪われとるからやろう。

いくら夏でも、冷やされ続ければ最悪命取りにもなりかねん。

灯りが点いとるんは、人がいる証。

それが犯罪者かもしれんて可能性もあるが、周りの様子を見る限り集団で根城にしとるようには思えんから、いても精々2〜3人。

携帯を確認したら電波はちゃんと拾っとるし、それくらいならたとえ鉢合わせたとしても助けが来るまで持ちこたえられる。

まあ、ちょっと偏屈なだけの普通の人て言うのが、一番ありがちやし。

大きく深呼吸して気持ちを落ち着けて、獅子がくわえた重たいノツ

カーに手を伸ばした。

第一話 | 平次 | (後書き)

ホラーでコメディな平和話……の入り口へのご招待でした。

舞台を洋館にするか和風建築にするかで悩みましたが、ホラーなら

やっぱり洋館がお約束(笑)。

なにはともあれ「雨隠^{あまがくれ}の館^{やかた}」ここからスタートです。

では、phantomさんの可愛い和葉ちゃんにパスっ！

by 月姫

第二話　― 和葉 ―

「平次い……。」

ぶるっ、っと体全体に悪寒が走る。

雨に濡れて寒いんはもちろんやけど、それだけやない。

「取り合えずこれでも羽織うとれ。」

平次は自分が着とったジャケットをあたしに掛けてくれた。

さっきからあたしらは、このなんとも気持ちの悪いお屋敷のドアの前に立ったまんまや。

何遍ドアをノックしても、平次が大きな声をかけても、誰も出てきてくれへん。

灯点いてんのに、人の気配がまったく無いんや。

絶対変やてここ。

「平次……。諦めよ。誰もおらへんて。」

平次の背中にしがみ付いて、時々振り返ったりしながら辺りを見回す。

やって、まだ昼間なんになんでこんなに暗いんよ。

しかも雨が酷うて、まったく何も見えへんし。

「何言うてんねん。こんな雨ん中、出れるワケ無いやろが。」

「やって……。」

「雨ん音に消されて、オレらの声が聞こえてへんだけや。」

そうなんやろか……。

平次が言うことは信じたい。

せやけど、この寒さは雨のせいだけや無いと思うんやけど。

もう一度、改めて見えない周りを見回してみる。

.....

窓から灯が漏れてるからや。

やから、お屋敷だけが白く浮き上がってるように見えるんや。
きつとそうや。

「和葉！」

あたしが余所を向いてると、いきなり平次に呼ばれてしもた。

慌てて平次ん方を振り返ると、平次はドアん方を向いたまんまや。
何やろと思うてそっちを見ると、ドアが少しずれとる。

「あつ。」

思わず声が出てしもた。

「入んで。」

あたしは平次にしがみ付いてるもんやから、そのまま引っ張られる
ような格好でお屋敷ん中に入ってしまった。

「ひゃっ。」

ほんま何なんここ。

さっきより酷い悪寒が体の底から湧いて来るやん。震えが止まらへ
ん。

それに、何で今ごろドアが開くんよ。

平次は初めっから押したり引いたりしてたやんかあ。

しかも.....

しかも誰もおらへんしい.....

あたしらがおるんは、玄関言うよりは、だだっぴろうてホテルのロビーみたいなどこやった。

しかももしかかも、ドアの鍵開けてすぐに人がどっかに隠れられるようなところ見当たらんやん……。

オートロック？

……。この古さからいうて、それは無いやんなあ……。

あかん。

いらん事考えるんは止めとこ。

謎解きは平次の担当やし。

「誰かいてるんか……！！」

平次の大声にも、相変わらず返って来るモンは何も無い。

返事はもちろんやし、物音一つせえへん。

「ほな、勝手に使わせてもらうで……！！」

平次はそう言うのとズカズカ歩き出してしもた。

「ちよっと平次。ええの？」

「仕方無いやんけ。誰も出てけえへんし、こんだけボロなんや家主も細かいことは気にせえへんやろ。」

「そうやろか……。」

何度見回して見ても、まったく人の気配はあらへん。

それやのに、あたしから見える限り全部の灯が点いてるんは何でなん……。

「この部屋でええやろ。」

あたしから右手にあった1番近いドアの前で平次が言うた。

「あたしは平次の側やったら、どこでもええよ。」

こんなトコで独りなん絶対嫌や。

Tシャツを掴んでいる手に力を込めて、平次から絶対に離れへんて伝えてみる。

「・・・・・・・・・・。開けるで。」

平次も少しは緊張してるんやろか？

今度はえらいゆっくりとドアを開けた。

平次の肩越しに部屋の中が見える。

そう、文字通り見えたんや。

ここにも灯が点いてたんやから。

「何やこの部屋？」

珍しく平次が疑問の声を上げた。

けど、あたしも平次に同感や。

ぱっと見た感じは、机や小さいベットが3つあって学校の保健室に似てるんやけど、ここには明らかに違和感がある。

保健室とかって普通は、病人のこと考えて白っぽい色やろ。

せやけど、この部屋のカーテンと絨毯は真っ赤なんや。

毒々しいまでの紅。

「平次・・・・・・・・他の部屋にせえへん？」

こんな部屋、余計落ち着かへんわ。

「ちいとくらい我慢せえ。」

その部屋ん中に、あたしはまたもや引っ張り込まれる形で入ってしもた。

「とにかくお前は着替え。そのままやったら、確実に風邪引くで。」

「せやけど・・・・・・・・。」

あたしさっきから”けど”ばっかりや。

せやけど仕方無いやんなあ、そういう状況なんやから。

あたしが躊躇ってる理由が分かったんか、

「外におったるから、終わったら言えや。」

平次はドアを開けようとする。

ゾクッ。

「やっぱあかん。ここにおって。」

「ええんか？」

「お願いやから。そこにおって平次。」

例えばドア1枚隔てた所やっても、こんな場所で平次の姿が見えへんようになるんはどうしても怖い。

「けど、そっちの壁ん方見とってな。」

裸を見られたことが無いワケやないけど、着替えるを見られるんはやっぱ恥ずかしい。

平次が壁に手え着いてじっとしてるんを確認してから、あたしは着替え始めた。

濡れた上から平次のジャケットを羽織ってもうたから、内側まで湿ってしもてる。

少しでもはやく乾くように、裏返してベットにかけることにした。ハンガーなんてもんはここにはあらへんし、フックすら壁に存在してへん。

自分の濡れた服は、タオルに包んでバックに仕舞うつもりやからええけど。

なるべく音を立てへんように、細心の注意を払いながら服を脱ぐ。それでも、衣擦れの音は出てしまうもんや。

下着までぐっしよりやったから、ブラのフロントホックを外す音なんかパチッちゅうて部屋中に響き渡ってしもた。

そつと平次の方を見ると、肩がピクッて少し動いたみたいやった。もう、静か過ぎるんがあかんのや。

「っ・・・！」

こん時になって、あたしは初めてそれに気が付いた。

そっからは、もう音なん構わずに速攻で着替えをすませ、真っ赤なカーテンに近寄る。

そして、一気に左右に開いたんや。

「キャ――――！！！！」

「和葉？！！」

そこは周りと同じ壁やった。
カーテンの奥に窓なん無かったんや。

第二話 | 和葉 | (後書き)

月さまの服部に続きまして、phantomの和葉でした。

緊迫感に欠ける・・・とか思ってるそのあなた！私の和葉はこれで大々マジメです（笑）

「雨隠の館」和葉サイド、服部依存症の和葉がここから始まります。

「平次平次へへへっじ！！怖いからあたしから離れんといてな！！」

b y p h a n t o m

第三話 | 平次 |

後ろから聞こえた何度か事件現場で聞いた事のある甲高い悲鳴に反射的に振り向くと、着替え終えたらしい和葉がカーテンの前でへたり込んで固まっとった。

「どうした?」

ざっと部屋を見回しても、特に変わった事なんない……と思う。取りあえず和葉を立たせて簡単に確認したが、怪我したとかでもない。ただ、酷く震えてて、オレの腕を痛いくらいに掴んどる。

「何があった?」

「……まど……」

「窓?」

顔を背けたままの和葉が指差したのは、真っ赤なカーテンのかかった窓。

「……いや、窓やと思っとった場所。」

「壁……?」

和葉が開けた、ドレープ言うんやったか、ゆったりした流れるようなひだを持った鮮紅色のカーテンの向こう、本来なら窓があるはずの場所に現れた、壁。

「……着替えとったら、何や気になって……」

「そんでカーテン開けてみたら、窓やなくて壁やった」

「うん……」

カーテンから目をそらしたまんま、和葉が頷く。

和葉は推理みたいに理詰めで考える人は苦手やし色々ヌケとつてよ
うボケもかますが、変なトコで鋭くて細かい事を見てたりする。
今度もそれで氣い付いたんやろう。

「ちょお、ここで待つとれ」

「イヤや！」

「カーテンとこ行くで？」

「……」

カーテンの方を見ないくらい怖がつとるから待つとれ言うたんに、
それもイヤらしい。

仕方なく、左腕に和葉くっつけたまんま、カーテンのかけられた壁
に近づいた。

壁は、ホンマにただの壁やった。

カーテン持ち上げて周りで見比べても、もしかして塗り込めたんか
と手で触れて叩いてみても、元から窓なんなくて壁やったと思
えなかった。

誰が何のためにこんな事したんかはわからん。

わかるんは、この部屋の異常さと得体の知れない気味悪さだけや。

「和葉、荷物纏めろ」

腕に張り付いた和葉を促して、オレも濡れて張り付いたGパンだけ
手早く穿き替える。

上着は防水加工してあったから、Tシャツまで替える必要はない。荷物を纏めるついでに、ペンライトや簡単なサバイバルキットが入った小さなケースを引っ張り出して、それについとるカラビナをベルト通しに引っ掛けた。

「携帯だけは手放すなや」
「うん」

荷物抱えた和葉が、オレのシャツを掴む。
開いたドアの向こうは見知らぬ部屋なんて小説みたいな事もなく、あっさりと玄関へと戻った。

玄関ドアの隅に荷物を置いて、改めて観察する。

玄関ホールは3階までの吹き抜けになったとって、中央の大きな階段は2階から左右に分かれてその上へ続いとる。

さっきオレらが入った右側の部屋は、その隣にももう1部屋あって、その奥が廊下になったとるようやった。

見た感じ、左側も同じような造りになったとるらしい。

正面は階段の影になったとてよう見えんけど、多分左右に延びる廊下に沿って部屋が並んどるんやと思う。

見た目は、ただの放置されとる屋敷。

せやけど、それだけではない神経に障る何かが、オレらに言いような居心地の悪さを感じさせとった。

静まり返ったホールに、雨音だけが響く。

雨は、さっきよりも強くなつとるようやった。

時々雷も鳴つとって、空が光る度に玄関脇のステンドグラスが床に色をつけとる。

「……まだ、外には出られんな」
「平次い……」

雷はあんまり怖がらんけど暗い所やようわからんモンが大の苦手な和葉が、オレの腕を抱え込むようにして引っ付いて来た。いつもなら楽しい感触やけど、楽しんどの余裕はない。

何があるかわからん時は、少しでもコンディションを整えておく必要がある。

今出来る最善の備えはしたつもりやけど、その『何か』の見当がつかんのが酷くもどかしい。

焦りを伴った苛立たしさを振り払おうと大きく息をついた時、どこからかキイツという少し錆付いた蝶番が擦れる音が聞こえた。

第三話 | 平次 | (後書き)

「振り出しに戻れ」

……いえ、すぐろくをしてるワケではありませんが（笑）。

取りあえず、この平次はおかしな場所からは逃げる事を選択しました。

さあ、これからどうなる！？

「離れんなや、和葉」

b y 月姫

第四話 | 和葉 |

キィ・・・キィ。

「ひっ・・・」

何なんあの音。

どっから聞こえてきてん・・・。

あたしはしがみ付いている平次の腕に、一層力を込めてくっ付いた。胸で平次の腕を挟んでるなん関係無い。

やって平次もあたしを落ち着かせるように腕に手を乗せてくれたんやけど、意識はたぶんあの不気味な音の方へいっとるはずやし。

ボタン・・・。

ドアが閉まったんやろか？

コツン。コツン。コツン。

だっ・・・誰かが歩いてるんや・・・。

コツン。コツン。コツン。

近付いて来とる・・・。

平次は階段の後ろの方を見とる。

音はあっちから聞こえて来てるんや・・・。

あたしは恐さで、この靴音がどっから聞こえてるんかまったく分からへん。

しかもここ、音が変に響いてんちゃうん・・・。

コツン。コツン。

止まった？

恐うて目え閉じてしもた。

「おや。お客様でしたか」

ひええ~~~~~~~~!!!!

なっ・・・なんなん・・・こん声え・・・。

人間の声ちゃう!!

ひしゃげた蟊蛙がしゃべつとる!!

それに・・・この感じも異常やって・・・いきなりさつきより寒なったし、この・・・腐った様な匂いはなんなん・・・。

「すみません。急に雨が酷うなつてしもて、勝手に雨宿りさせてもろてます」

平次・・・なんでそんなに普通に答えてるん。

あたしは未だに恐うて、目開けられへんのに。

「それは、さぞお困りでしょう」

「そうなんですわ。そんで何遍か声掛けたんやけど、誰も居らへんようやったんで、ドアも開いてたし、勝手に入つてしもてすみませんでした」

「それは申訳無いことをしましたな。ここには、わしとお嬢しか居りませんからな」

人ちゃう・・・こん声絶対に人とちゃうて・・・
あたしは平次にこれ以上近づけない程近付いて、ぎゅぐゅて腕に力入れたんや。

オデコも平次ん腕に押し付けて。

「大丈夫か、和葉？」

ぶんぶん、って首を振るんが精一杯や。

「そんなに寒いんか？」

「・・・・・・・・」

平次の優しい声は嬉しいんやけど、体が震えて声が上手く出へん・・・。

「そちらのお嬢さんは、どうもお疲れのご様子ですな。お部屋にご案内いたしましょう」

「そらおおきに。ほな、お世話になります」

いやっ・・・いややあ・・・。

「・・・・・・・・へーじ・・・・・・・・」

あたしは薄っすらと目え開けて、半泣きの状態で平次を見上げた。

「大丈夫やて。そんなに体も冷えとらんみたいやし、少し休ませてもうろうたら落ち着くて。」

そう言うて、平次はあたしのオデコを指でコツンと弾いた。

そのちよつとした反動で、もう1人の人物が視界に入ってしまった。

「!!!!!!!!!!」

あ”っ・・・・・・・・・・あっ・・・・・・・・・・!!!!!!

あれは何やの・・・・・・・・。

怖いモン見たさ・・・・・・・・やなくて・・・・・・・・恐くて目が離せへんようになってしもた・・・・・・・・。

あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・青い・・・・・・・・顔も手えも髪も・・・・・・・・青いちゃん・・・・・・・・。

それに・・・・・・・・それに・・・・・・・・鱗みたいなんも付いとる・・・・・・・・。

目えなんぎよろっとしてでか過ぎやし・・・・・・・・口にあるんは牙ちやうん・・・・・・・・。

「ひいっ・・・・・・・・!」

目えが合うてしもたあ・・・・・・・・。

「さあさ、こちらへどうぞ。ゆっくりと休まれるがよかろう」

顔の端まである口がゆっくりと笑うた。

あたしの気力はここまでやった。

「和葉!!」

平次があたしを呼ぶ声が遠くに聞こえ．．．と．．．
．．．る．．．．．．．．．．．．．．．．

．．．．．平次にはあれが見えてへんのや．．．．．
．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．

第四話 | 和葉 | (後書き)

「一歩下がって一回休み」

ちやうちやう。和葉は休んでいるワケではない(笑)

やっとそれらしきモノが出てきました!

これだけで何なのか、分かったあなたは妖怪博士!?

「平次~~~~!! 何であれが見えへんの~~~~!!」

b y p h a n t o m

第五話 | 平次 |

オレにしがみ付い妥妥た和葉の腕から、いきなり力が抜けた。
そのまま崩れるように倒れこむ和葉の身体を、慌てて抱きとめる。

「和葉！おい、和葉！！」

軽く頬を叩いてみても反応がない。
完全に氣い失っ妥妥た。

「これは大変」

さして慌てた風もなく、この館の住人がオレの腕の中を覗き込もうとする。

無意識のうちに、オレは和葉をそのオトコから隠すように抱きかかえてた。

「さ、こちらへ。ああ、お荷物はわしが運びましょう」

オトコは氣にした風もなく、オレらの荷物を持つと階段を指差した。
上に行けいう事やろう。

「いや、雨が止んだらすぐ失礼しますよって、その辺の部屋貸してもらえれば充分ですわ」

「そうは参りませんよ。何しろ古い館、下にはお客様にお貸し出来るような部屋がありませんのでな」

オレとしてはなるべく動きやすい玄関に近い部屋が良かったんやけど、勝手に入って来た見知らぬ他人に好意で部屋貸そう言うてくれ

とる家主に逆らってまで我侭は言えない。

オトコに気付かれんように小さく息をついて、立ち上がった。

「どうぞ、こちらへ」

案内されるままに、和葉抱えてゆつくりと階段を上る。

光量の足りない古ぼけたシャンデリアの灯りが、階段にオレらの影をぼんやりと落とす。

昔は綺麗に磨かれとったんやろう階段は、普段使つとるらしい所以外はうっすらと埃が被つとって、一段上るたんびにギシッと板が撓む音を響かせた。

「あ……」

踊り場に人影を見つけて声を掛けようとして、思わず立ち止まった。

「驚かれましたか？」

「はあ、まあ……」

踊り場にいたのは、椅子に座った等身大の人形。

年代モンやけど豪華な振袖着た人形は、薄暗いこの館の灯りの下では今にも動き出しそうに見えた。

「人形は、お嬢の趣味でしてな。あちこちに飾っております」

オトコの指差す先には、これも等身大のアンティークなドレスを着た人形が3体、椅子に座って中空を見ている。

古い洋館に古い人形はあまりにもハマってて、気味が悪い。

「お部屋にはありませんから」

オレの気分を感じ取ったんか、オトコはそう言って2階の左手、階段から2つ目の部屋のドアを開けた。

20畳くらいはありそうな広い部屋は、さっき下で見た部屋とは違って壁紙も調度もみんな落ち着いた色で纏められとって、少しだけほっとした。

「何か、お飲み物をお持ちしましょう」

「いや、休ませてもらえるだけで充分ですわ。氣い使わんと言って下さい」

広い部屋に相応しいキングサイズのベッドの端っこに和菓を寝かせながら、オトコの申し出を断った。

親切心からオレらの世話をしようとしてくれとるんやろうけど、何故かイマイチ信用しきれないんや。

悪い人には思えんけど、善人やとも言い切れない。

「それでは、お荷物はここに置いておきましょう」

オトコはそれ以上勧める事もなくオレらの荷物を置くと、3階の右手側の一番奥が自室やから何かあったら来てくれ言うて部屋を出て行った。

その足音が消えるのを待って、改めて部屋を観察する。

まず真っ先に見たんは、水色のカーテンのかかった窓。

そうっと開けてみると、ここはちゃんとガラスの入った窓になっと

った。

門を外して開けられる事を確認して、視線を部屋に戻す。

部屋にあるのは、和葉を寝かしたベッドと、その反対側の壁に嵌め込まれた大きな姿見だけ。

クローゼットの1つもない。

何となく不自然な感じもするが、取りあえずは安心出来る場所やと思う。

時折光る雷を避けるようにカーテンを閉めて、ベッドに戻った。

端っこに寝かせてた和葉を少し真ん中に寄せて、寝苦しいやろから上着だけ脱がせる。

下に着とるんは、肩とか背中とか胸元とかが広く開いたキャミとかいう服やったから、冷えんように薄い肌掛けを掛けてやって、オレも疲れたからその隣にひっくり返った。

カーテンを通して部屋に入ってくる稲光が、足元の方にある大きな姿見を鈍く光らせる。

その光が姿見の中に何か別のモノを映しているような気がして、和葉の方に向き直った。

急に氣い失った和葉。

あれは安心して氣い抜けたんとは違う。

この館の住人や言うあのオトコを見て、氣絶したんや。

不健康そうな青白い肌をした、若いんか年食ってんのかわからん小太りのオトコ。

横に広い輪郭とデカイ口、ぎよろっとした目えに低い鼻をした、10人に特徴訊いたら10人ともが『蛙』や言うやろうオトコは、酷

い猫背のせいでそれでも低い背が余計低く見えて、どこか人間離れしとるようにも見える。

ねっちよりとした話し方も、あんまり気持ち良くはない。

オンナ受けは絶対しないタイプやけど、せやからて見ただけで卒倒するほどでもないと思う。

それとも、オレにはわからんだけで、あんまり人見知りしない人懷っこい和葉が氣い失うほどのモンがあるんやろか？

つらつらと考えとったら、和葉が小さく身動ぎした。

「氣いついたか？」

「……うん」

何度か瞬きした和葉が、オレを見て笑う。

その瞬間、どくんっと心臓が跳ねた。

「平次……？」

ゆっくりと起き上がった和葉が、上からオレを覗き込んだ。

下ろしたまんまの髪が、剥き出しの肩から広く開いた胸元に流れる。

「どうしたん？」

首を傾げた和葉の指が、オレの首筋に触れる。

その感触に、ぞくりと背中に熱が走った。

青みを帯びる程に白い、ぬめるような冷たい肌。

それとは対照的な、血のような赤い唇。

そして、強烈にオトコの劣情を刺激する、黒く濡れた底のないよう

な瞳。

「平次？」

和葉の大きな瞳に覗き込まれて、オレは押さえつけられたように身動きが出来なくなった。

ソノ気もないオトコも見つめられただけで一瞬で落ちるような、姉ちゃん一筋で他のオンナなんかボチャくらいにしか思っくらんあの工藤ですら落とせそうな、直接的に雄の本能に働きかける、底知れない官能を湛えた瞳。

和葉や……ない……？

和葉とはそれなりの『お付き合い』しとるから、誘うような『オンナの顔』も幾つも知つとるけど、こんな瞳を見せた事なんない。

いや、人間のオンナに、こんな瞳が持てるワケがない。

「……か……ず……」

オレン中の今まで自覚した事もないような荒々しい本能が、目の前の獲物を仕留めたいて暴れてるんがはっきりとわかる。

それを押さえ込むために掌に爪が食い込むくらいに強く拳を握り、思いつきりハラに力を込めた。

「和葉っ!!」

ハラの底から、思いつきり叫ぶ。

壁に埋め込まれる鏡が、びりつと震えたような気がした。

第五話 | 平次 | (後書き)

「2つ進む」

いえ、2階に移動したんで(笑)。

何だか取り憑かれたっぽい和葉ですが、さて……。

「和葉!?!……いや、オマエ誰や?」

b y 月姫

第六話　― 和葉 ―

遠くに平次の声がする。

平次があたしんこと呼んでる……………。

『　　私の邪魔をするでない　　』

あ……………頭ん中に……………女の声が……………。

あたしは必死で自分を覚醒させようとしてるんやけど……………体が……………金縛りに合うたように動かへん。

しかも、すぐにまた意識が薄れていきそうになってまう。

『　　おとなしゅうしておれ　　』

「和葉っ!!」

暗い闇に飲み込まれそうになったあたしに、今度ははっきりと平次の声が聞こえた。

「……………へい……………じ……………」

必死で目を開けたつもりやったのに……………あたしの目えは開いてたんや。

瞬きさえ出来へんほどに。

『 まあよい　そこで見ておるがよいわ 』

見る・・・・・・・・・・なに・・・・を・・・・・・。

女の声が嫌な笑いを含んであたしの中に響いた。
その声にあたしは押さえ込まれてまう。

あたしは寝ている平次を見下ろしてるみたいやった。
平次は何だかとても苦しそうや。

「和葉！！しっかりせえ！！和葉っ！！」

あたしの指がゆっくりと平次の上を這うように、首から胸へと辿っていく・・・・。

平次の顔が目の前全部になったかと思うたら、あたしの舌が無理矢理平次の唇を抉じ開けて・・・・。

・・・・・・・・・・いつ・・・・いやや・・・・。
こんないやや・・・・。

・・・・・・・・・・あたしの・・・・。
・・・・・・・・・・あたしの平次に触るなっ！！

自分の意思では無い何かに動かされている体を、あたしの意思では動かない体を、怒りの力で押し止める。

『 愚かなことを お前の男に触れているのはお前自身
ではないかえ 』

・・・・・・・・・・・・・・・・あたしやない！あたし
はこんなことせえへん！

「・・・・・・・・・・で・・・・・・・・・・て・・・・・・・・・・い・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・あたしの中から出てけ
っ！！

得体の知れへん恐怖より、あたしの平次に触れた怒りの方が勝る。
平次を組み敷いた様な体制のまま、これ以上絶対に動かへん。これ
以上、平次に触れさせへん。
例えそれが、あたし自身の体であってもや。

「か・・・・・・・・ず・・・・・・・・は？」

平次がさつきより苦しそうにあたしを見上げてくる。

「・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

あたしは大丈夫やから。
って言いたいのに声が出えへん。

『 小娘が 小賢しいまねをしおって 』

「ぐっ・・・ああ・・・！！！」

いきなり体中が締めつられた。

手も足も体も・・・首や頭までもが・・・。

ぬめぬめしたモンが・・・体の表面に巻き付いとる感じ・・・
・や・・・。

ああああ・・・くうっ・・・。

体が勝手に反っていく・・・骨が・・・軋しむ・・・。

「っん・・・」

い・・・息が・・・出来へん・・・。

「和葉！和葉！」

締め付けられて折れそうな首を、痛みに耐えて平次へ向ける。

平次・・・平次・・・。

瞬きすら出来へん目えから、涙が溢れだした。

『 お前が死したのち この男は我が存分に喰らうてやるぞえ 』

女の高笑いが再び頭んに響く。

. . .
. . .
させ
. . .
. . .
. . .
へ
. . .
. . .
ん
. . .
. . .
. ○

. . .
. . .
. . .
. . .
. . .
. . .
. . .
そん
. . .
. . .
. . .
な
. . .
ん
. . .

あたしの想いが通じたんか、雷の光が女の正体を浮かび上がらせたんや。

壁にある鏡。

そこから伸びとる白いモンが、あたしの体に巻き付いとる。

あたしは考えるより先に行動に移した。

最後の力を振り絞って、その鏡に体当たりしたんや。

体中の骨が悲鳴を上げとったけど、そんななんどうでもええ。

こんな処で平次を死なせる訳にはいかへん。

こんな得体が知れへんモンに平次を殺させる訳にはいかへん。

あ
た
し
が
守
る
ん
や
平次は
平次は

第六話 | 和葉 | (後書き)

「代役を立てて1回休み」

うつ・・・そうではなくて・・・!

今回は和葉ちゃん、がんばりました!!

私の和葉が”あたしの平次”って・・・..おお!! (笑)

「平次!! あたし以外の女に何やってんの・・・!! ってあたしやん・
・・・うつ。」

b y p h a n t o m

第七話 | 平次 |

どんっという鈍い音と同時に、呪縛されたように動けなかった身体
の自由が戻った。

「和葉っ!!」

一動作で起き上がる。

和葉は、大きな姿見の前で蹲っとった。

「大丈夫か、和葉?」

「……うん、だいじょうぶ……」

苦しげに顔を顰めて頷く和葉を、鏡から引き離す。

荒い息を繰り返す和葉は、オレの良く知るいつもの和葉に戻った。
た。

改めて、鏡を見やる。

鏡は、幾つか輝が入ったものの、割れてはいない。

ただ、白く濁っとった。

いくらオナナの力やいうても、大人が思いっきり体当たりしたのに、
割れない鏡。

ついさっきまで、まるで磨かれたばかりみたいに曇り一つなかった
んに、2つ3つ輝が入っただけで白い絵の具混ぜ込んだみたいに濁
って、何も映さなくなった鏡。

飛散防止フィルム貼ってあったから割れなかったんやとか、何か液
体を使った鏡やったから輝が入って化学変化起こして濁ったんやと

か、思いつく限りの理屈を並べてみても、自分を納得させられる答えは出てこんかった。

「平次……ここ、イヤや」

力の入らん手で、和葉がオレのシャツを掴んだ。
血の気の引いた白い唇が、小さく震えとる。

オレから見えたんは、和葉が鏡に体当たりかましたとこだけ。

和葉が鏡に何を見たんか、何を感じたんかは、オレにはわからん。
わかるんは、あの異様な状況を終わらせてくれたんが和葉という事。
せやからて、何があったのか今の和葉に訊くんも酷や。

幸い、いつでも動けるようにて、休ませた時も靴は履かせたままやったから、このまま動いても足元には一応不安はない。

鏡が割れんかったからか、打撲以外に怪我らしいモンもない。

「立てるか、和葉？」

「……うん」

ベッドに放り投げてある上着を取ってやりたかったけど、それよりも和葉が安心出来る所に移動する方が先や。

この際、荷物も後でええし、最悪取りに戻れなくても仕方ない。

「玄関……やな」

「うん……」

この館の中でオレらが知つとるんは、この部屋と1階の窓のない部屋と玄関。

ほんの一部しか知らんのに全てを判断するなん乱暴やけど、この館の住人やいうあのオトコに案内された部屋で起きた事を考えれば、

他の部屋を選ぶよりも少しでも勝手のわかる玄関の方が落ち着くはずや。

「行くで？」

和葉を促して、ドアの横の壁に張り付く。

細くドアを開けてじっと息を殺して外の様子を窺っても、特に何の気配も感じない。

取りあえず大丈夫やろうとほっと息をついて、部屋を出るために和葉の手を取ろうとした瞬間、いきなりドアが大きく開いて何かに思いつきり背中を押された。

「うわっ！」

「へい……」

転びそうになったオレの後ろで、廊下に響くような音を立ててドアが閉まる。

慌ててドアを開けた時、そこに和葉の姿はなかった。

「和葉！？」

オレが何かに突き飛ばされてから、体勢を立て直してドアを開けるまでせいぜい数秒。

この部屋から出たがつつた和葉が自分から隠れるなん絶対にないが、唯一隠れられそうなベッドの下をカバーを引っぺがして覗き込む。

子供が入るんがやっとの狭い隙間はうっすらと埃が積もって、ここ暫くネズミ1匹通つとらん事を証明しとった。

せやったら、他に何か仕掛けが……？

忍者屋敷みたいに隠し扉でもあるんかと壁に目をやって、思わず息を呑んで立ち尽くした。

輝が入って白く濁ったのは、鏡。

こんな一瞬で修理も張替えも出来るワケないその鏡が、何の歪みもなくオレの姿を映し込んでる。

常識では計り知れない現象。

それを目の当たりにして、オレの背中を冷たい汗が伝った。

第七話 | 平次 | (後書き)

「3が出るまでループ」

3に意味はありません(笑)。

消えてしまった和葉ちゃんと再会出来るのはいつ？

「和葉あ！！隠れとらんと出て来い！！……って、どこにも隠れる
トコないやんけ」

b y 月姫

第八話 | 和葉 |

「へい……わっ！」

体に何か巻き付いたと思った瞬間、物凄い勢いで後ろに引っ張られた。

しかもとっさに目え閉じてしもたから、ドアが閉まったんしか分からへん。

「うっ……」

体中が痛い。

さっき締め付けられた痛みに今のが合わさって、息をするんも辛いくらいや。

「うう……へい……じ……」

余りの痛さに、なかなか目えが開けられへん。

「平次……平次？」

何度呼んでも平次からの返事がない。

痛みを我慢しながらゆっくり片目から開けていく。

「……ここ……どこなん？」

さっきまでおった部屋とちゃう。

薄暗い中にぼくと炎だけがいくつも見えとるんやけど。

両目開いて見ても、他に何も見えへん。

も一度目え閉じてから深呼吸をして立ち上がった。

恐無い言うたら嘘になるんやけど、ここまで来たらそうも言ってられへんし。

「あっ」

少しづつ暗さに慣れてきた目えに、あるもんが見えてきたんや。

暗い壁にびっしりと並んでるんは……窓……それとも鏡？

1番近いやつに近付いてみたら、あたしと後ろにある炎が映った。

やけど・・・離れると、あたしの姿の中に違う景色が現れる。
数歩下がって、全体を見回す。

「あれは・・・」

あれはあたしと平次が初めに入ったあの赤い部屋や。
ベットが3つに机やドアがあるから間違い無い。

・・・あのカーテンの後ろにはこの鏡があったんや・・・
。

なぜだか突然そう思った。

やったら、あん時の誰かに見られてるように感じた理由も納得がい
く。

その他のんもよう見ると、見覚えがあるモンがいくつもあるやん。

「あっちのはさっきの部屋や・・・これは・・・玄関やな・
・・・」

もう少し下がってみよ。

「平次!!」

もっと全部が見えるように下がろうとして、鏡の中に平次を見つけ
た。

「平次!! 平次!!」

何遍呼んでもまた平次からの返事はない。

「あたしの声は平次には届いてへんのや」

鏡の中の平次は、ドアを片っ端から開けていつてる。

必死にあたしを探してくれてるんや。

あたしも早、平次を探さな。

体の痛みは酷かったんやけど、そんなん気にしてられへん。

あたしは勢いよく出口を探そうと振り返った。

「ひっ!!」

飛び上がった。

正に、言葉通りにあたしは飛び上がって数歩後ずさってしもた。

「やっと気付かれましたか」

出た！

出た！出た！

あの・・・あの・・・青い妖怪や・・・。

「普通はもっと早く気付かれるもんですけどけどなあ」

「いっ・・・いつからそこに居ったん？」

「あなた様がここにいらしてから、ずっとここに居りますが」

まったく気付かへんかったわ。

きっとこの部屋全体が生臭いからや。

「妖怪のくせにあんた存在感薄いんとちゃう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あかん・・・あかんやん、あたし。

こんな挑発的なこと言うてどうすんよ〜。

恐さで頭が回って無いんやわ・・・。

きつとそうや。

「やはりあなた様には、私本来の姿がお見えになっていたんですな」

「青いカップ・・・やろ？」

「失敬なっ！あのような下等な者共と一緒にしないで頂きたい！」

「ほんなら・・・青いカエルなん？」

「あなた様はお目が悪いようですね。私はカワエロと申す由緒正しき妖怪でございます」

「カワエロ・・・エロ・・・」

あたしはまた違う意味で、数歩下がってしもた。

「また、好からぬ事をお考えで・・・」

妖怪のくせに溜息なん付いてる。

あたしも恐さが自分の許容量をオーバーしたんか、口が勝手に動いてまう。

「お嬢がお待ちでございます。こちらへ」

そう言うて、カワエロいう妖怪はあたしの前を歩き出した。

付いて行くより他に無いんよな。

それが平次に逢える1番早い方法なんやて自分に言い聞かせて、あたしはその不気味な後姿を追いかけることにしたんや。

第八話 | 和葉 | (後書き)

「落とし穴に落ちて、遠回り」

ああ・・・和葉なんかこんなばっかや・・・すんません。

しかも、和葉ちゃんあまりの恐さに少々壊れ気味？

妖怪相手に喧嘩売っております (笑)

「平次～～！早よ見つけてくれへんとあたし何しでかすか分からへんよ～～！」

b y p h a n t o m

第九話 | 平次 |

——人を呑み込む鏡。

ふと頭を過ぎった安っぽいホラー小説みたいなフレーズを追いつくように、強く頭を振る。

この世の中には理屈で説明のつかんモンがあるのは否定せんけど、その殆どは今の知識が追いついとらんだけのモンや。
大抵は、何かカラクリがある。

「考えるんは後や」

口に出す事で、このワケわからん状況に何とか説明つけようと思考に沈み込みそうな自分に喝を入れた。

とにかく、今は和葉捜すんが先や。

ポケットから携帯を引っ張り出す。

この邸に入った時には電波を拾った携帯は、今は何故か圏外を表示しとった。

「繋がらんか」

電波を拾ったれば着信音を頼りに和葉の居場所を見つけられるかと思っただが、その手は使えないらしい。

仕方なく携帯をポケットに戻して、改めて部屋の中を確認する。

ベッドの下は見た。

カーテンを引いたままの窓は、内側から門がかかっている。

壁も、ただの壁や。

縁にアンティークな装飾がされとる鏡も、どこにも仕掛けみたいなモンはない。

どこに消えたんかはわからんが、和葉はもうこの部屋にはおらん。せやけど、この邸のどこかにいる事だけは確かや。

「……家捜ししてでも見つけたる」

握った拳にぐっと力を込めて、勢いをつけるように部屋を飛び出した。

まずは、オレたちが案内された2階の左側の棟にある部屋のドアを、片っ端から開ける。

客間らしいベッドの置かれた部屋や、アンティークな応接セットの揃った部屋。

何もない空き部屋に、ムダなほど豪華でデカイ風呂や広い便所。

右側の棟も同じ造りの部屋が並んどったが、どこにも和葉はおらん。

階段を駆け上がって3階の部屋を回る。

こっちは2階よりも1部屋が広くて、そんな代わり数は少ない。

置いてある調度も、2階のモンより高級そうなモンが並んどる。

もしかしたら、あのオトコが『お嬢』言うてたオンナの部屋なんかもしれない。

ここにも、和葉はおらん。

「入んで！」

3階の右側の棟の一番奥。

あのオトコが自室だと言ってた部屋の前で、一応声をかける。

返事を待つつもりなんないから勝手にドアを開けたが、大抵は部屋における言うてたオトコはおらんかった。

2階にも3階にも和葉はおらんかった。

残るは、1階。

下に行くためにオトコの部屋を出ようとして、ドアの横に嵌め込まれとる鏡に気がついた。

どくん、と心臓が跳ねる。

2階と3階にある内装も調度も違う部屋に唯一共通してたんは、縁の装飾は違うものの壁に嵌め込まれとった大きな鏡。

「……ただのインテリアや」

低く言い捨てて、部屋を出る。

この邸で気になるのは、鏡だけやない。

廊下や階段に飾られた、衣装も顔立ちも違う何十体もの等身大の人形。

その生氣のないガラスの瞳が廊下を走るオレを追って来とるようで、神経に障った。

「ただの人形や」

ずっと誰かに見られとるような不快感を振り払うように、自分に言い聞かせる。

1階に駆け下りて、手当たり次第に部屋を見て回る。

左側の棟は使用人が使ってたのか、広い台所の他には狭い部屋と質素な風呂やトイレが並んどった。

右側の棟は、最初に入ったあの部屋以外は全て、椅子1つ置いてない空き部屋やった。

これで全ての部屋を回ったハズなのに、どこにも和葉はおらん。

「他に、部屋があるんか……？」

額の汗を腕で拭って、何度か深呼吸をして弾んだ息を整える。

ふと思いついて、ポケットから携帯を取り出した。

「ここは繋がるんか」

上では圏外やったけど、ここでは携帯はちゃんと電波を拾つとる。

もしかしたらと和葉の携帯にかけてみると、小さなスピーカーからは呼び出し音が聞こえてきた。

同時に、どこからか和葉のお気に入りの曲が微かに聞こえてくる。

恐らく、和葉の携帯の着信音や。

息を殺して、音のする方向を探る。

音は、最初に入ったあの部屋から聞こえてきとるようやった。

あの部屋から出る時には、和葉は携帯を持っとったハズや。

今、和葉はあの部屋にはおらん。

なのに、音はあの部屋からする。

音を聞き逃さんように、そうつとドアを開ける。

音は確かに、この部屋ん中からしとった。

第九話 | 平次 | (後書き)

「3が出ないので、もう一度ループ」

3に意味なし(笑)。

頑張って邸中を探し回った平次ですが、まだ和葉は見つかりません。

「さっさと携帯に出んかい!どこまで待たせるつもりじゃ、コラ!

……って、携帯落としたんとちゃうやろな?」

b y 月姫

第十話　― 和葉 ―

カワエロの不気味な後姿を追いかける。

ここは、どうも地下みたいや。

地下言うより、洞窟言うんが合うかもしれへん。

そんなくらい暗うて、ジメジメしとって、音が不気味に響いて、さらになんとも言えへんほど生臭いんや。

ティララティティティララ・・・。

「うわっ!!」

あたしは神経を研ぎ澄ましてたもんやから、突然鳴り出した携帯の音に超過剰に反応してしもた。

ビクッ。

前を歩いとるカワエロの足も、ちょこっと跳ねて止まったみたいや。

この妖怪・・・。

あたしが、この妖怪は妖怪のくせに今ビビッタんちゃう？なんいらんこと考えとる間も携帯は鳴りっぱなしや。
急いでショートデニムから携帯を取り出す。

モニターを確認しなくても平次専用の着信音やって分かってるけど、暗闇に浮かび上がる名前を見るとほっとする。

平次。

あたしはそれだけで嬉しうなって、こんな時なんに顔が緩んでまう。姿が見えへんでも、直接声が聞けへんでも、この小さな器械はあたしと平次を繋いでくれてるんや。

そう思うて携帯を開きかけ・

バキッ！！

「！」

前の暗闇から伸びて来た白いモンが、いきなりあたしの携帯に巻き付くとそのまま粉々に砕いてしまった。

「・・・・・・・・」

「耳障りな音をさせるで無い」

あの、頭ん中に響いとした声が暗闇ん中から聞こえて来たんや。

ここは寒いはずなのに、あたしの背中には嫌なもんが流れる。

生臭さもさつきより酷うなったような気がする。

「お嬢、お客さまをお連れしました」

右腕を胸に当てるように折り曲げて、カワエロは深く闇に向ってお辞儀をしてる。

その奥の闇を、目えに力入れて見てるんやけど真っ黒で何も見えへん。

・・・・・・・・けど・・・・・・・・何かがおる。

・・・・・・・・それも・・・・・・・・とてつもなくでっかいモンや・・・・・・・・。。。。

暗闇の中にあたしの方から奥に向って、ぼう、ぼうって炎がいくつも灯っていく。

それやのに闇の方が強いんか、辺りは全然明るくなってはいかへん。

やけど・・・そやけどこの息が苦しい程の感じはなんやろ・・・

喉が渴いていく。

唾を飲み込みたいんに、空気だけが喉に入ってまう。

炎だけしか見えへん灯が、最後に今までのより大きく火柱みたいに
2箇所で燃え上がった。

丁度、あたしらの正面に。

「あっ」

その炎の間に・・・。。。

あれは・・・。。人形・・・。。それとも・・・。。。

「よう来たな小娘」

市松人形みたいな、長い黒髪で振袖を着た女の口が動いた。

真っ黒な髪に真っ白な顔、それなりに唇だけが炎に照らされて真っ
紅や。

「もうちと近こう寄れ」

その声にあたしの体は勝手に前に進んでまう。

カワエロの横を通り過ぎ、さらに前へ。

何か得体が知れへんもんに全身を舐められる様に見られてる感じが
する。

あたしはそれに逆らえへん。

「小賢しい小娘じゃが、毛色が変わったのもたまには良からう」

笑が含まれとる声が響く。

あたしは人形のすぐ前まで来てしもた。

近くで見るそれは確かに人形やった。

やって、一度も瞬きをせえへんし、身動き一つせえへん。

それやのに、紅い口だけは人間のように滑らかに動いとる。

もしかして・・・・・・・・人形の様に見えるけど・・・・・・・・
ほんまは・・・・・・・・。

ゾクッ。

やけど・・・・・・・・この体が竦んでまうような視線はこれや無い・
・・・・・。

恐い。

今までとは、比べ物にならへん程恐い。

「小娘よ我と博戯を楽しもうぞ」

女の声は、さつきよりも楽しそうや。

それに、益々あたしの恐怖は募っていつてまう。

「容易い遊びじゃ。そちが隠れそちの男がそれを見つければよい
だけじゃ。どうじゃ造作も無いことであろう」

何・・・・・・を言うてるんやろう・・・・・・・・。

あたしの頭は女が何を言っているのか理解することが出来へん。
遊び？

この状況で？

「館の中には13体の人間と同じ大きさの人形が飾られております」

カワエロがすぐ後ろに来て説明始めたのにも、驚きはせえへんかった。

「その中の1体にあなた様を隠させて頂きます。それを、お連れの方が刻限までに見付出せばよいだけのこと」

やっぱりよう分からへん。

人形の中に？

あたしを隠す？

「人間の言葉では”かくれんぼ”とか”隠れ鬼”とかいう遊びでございます」

「じゃが見付けられねばそちが新たな人形になるがな」

女の高笑が木霊する。

そして、2本の火柱が突然大きゅう燃えあがったんや。

「っ！」

青白い炎に浮かび上がる女の正体。

その目に睨まれて、あたしは再び意識が遠のくんを止められへんかった。

第十話 | 和葉 | (後書き)

「人生最大の大勝負 全財産を賭ける」

和葉の全財産って、服部から始まって平次で終わる……つまり服部平次だけ。(笑)

とうとう”かくれんぼ”だそうです。

しかも何やら命懸け。楽しそう……ふふ。(鬼)

「平次……携帯壊れてしもた……新しいの買うてな。」

b y p h a n t o m

第十一話 | 平次 |

真っ赤な絨毯とカーテンで彩られた、窓のない部屋。

この部屋のどこから音が聞こえて来るんか、余計な情報をシャットアウトするために目を閉じて集中したと同時に、いきなり音が途切れた。

もしかして和葉が出たんかと慌てて携帯を耳に当てると、呼び出し音も切れとる。

掛けなおしてみたが、今度は呼び出しもなしで通信不能のアナウンスが流れて来た。

和葉の手元に携帯があるんなら、オレからの電話にとっくに出とるハズ。

しつこく鳴らしたんに出なかった上に突然繋がらなくなったのは、拘束されとるんか携帯を取り上げられたんかのどっちかや。

そうやとしたら、携帯は多分もう手掛かりとしては使えんやろう。

和葉を捜す手段は1つ潰れた。

せやけど、ヒントはこの部屋にある。

ぐっと拳を握って気合を入れ直した時、どこからかオンナの囁い声が聞こえてきた。

「誰やっ!!」

「おお、恐い。そう大声を出すものではないぞ」

いきなり耳元で声がして勢い良く振り返ったが、誰もおらん。

「和葉はどこやっ!？」

「心配はいらぬ。我が大切に遇しておるわ」

また耳元で声がする。

声はする。

そこに何かの気配もある。

せやのに、振り返っても誰もおらん。

オレの背中を、イヤな汗が流れ落ちた。

「和葉はどこや？」

「心配いらぬと言うておろう？ 気の短い男じゃ」

「……和葉をどこにやった？」

「この邸の内に隠れておる。そちが鬼じゃ。捜してやるが良い」

オンナが楽しげに嗤う。

良く通る、それでいてねっとり肌に纏わりつくような、湿った冷たい声。

不意に嫌悪と恐怖とが入り混じったような説明しようのない感覚が湧き上がって、肌が栗立つんがわかった。

「何、ちょっとした戯れじゃ」

「戯れやと？」

「そうじゃ。我は退屈しておる。雨に難儀しておったそちらに屋根を貸してやったのじゃ、礼として我を楽しませてくりゃれ」

オンナのセリフに、一気に頭に血が上る。

そのまま喚き散らしたかったが、唇を噛み締めて何とか堪えた。

「和葉はどこや？」

「心配せずとも、そちにもちゃんと見える所に隠れておるぞ」

心底楽しそうにオンナが嗤う。

それに重なるように、邸の裏手の方から鐘の音がした。

「ああ、ほれ、こうしているうちにも時は過ぎるぞえ？あの鐘が次に鳴るのは、日付が変わる刻限じゃ。いつもは鳴らさぬ鐘じゃが、今宵はそちのために特別に撞いてやろう。13の鐘の音が終わるまでに見つけられれば良し、見つけられねば、娘は14番目の人形にして我が愛でてやろう」

「絶対に見つけたるわ！」

「その意気じゃ。さあ、我を楽しませてくりやれ」

神経に障る嗤い声を残して、オンナの気配が消える。

反射的に握ったままの携帯を見ると、デジタルの時計が丁度8時になったとこやった。

「……時間の感覚が狂つとる？」

この邸に入ったんは、まだ夕方前。

あれから2時間は経つとらんと思つとったんに、実際は倍以上の時間が過ぎとる。

何かに集中して時間を忘れる事はあるけど、この状況でこんなに狂うなんありえん。

「この邸がおかしいんか？」

頬を流れる冷たい汗を振り払うように、強く頭を振る。

今は和菓を捜す事が最優先や。

和葉はこの邸の中、オレに見える所に隠れとる。

タイムリミットは午前0時。

間に合わなかったら、14番目の人形にする。

14番目の人形。

この邸には、何十体て人形があった。

なのに14番目言う事は、あの大量の人形の中に特別な13体の人形がある言う事。

恐らくは、それが最大のヒントや。

携帯を操作して、11時50分にアラームをかけてポケットに突っ込む。

「12時の鐘の音が終わるまでで、シンデレラかい。オレは王子様でキャラやないで」

自分を奮い立てるように口に出して、笑ってみる。

蹴破るような勢いでドアを開けて、オレはまた走り出した。

第十一話 | 平次 | (後書き)

「ゲームの説明を読む」

ここから新たなゲームのスタートです。

和葉ちゃんがシンデレラなのは全然OKですが、平次は王子様じゃなくて若様だと思えます（笑）。

……だって、白タイツは似合わないと思うし（汗）。

「シンデレラのつもりなら、手掛かりくらい残しとかんかい！現代版なら、ガラスの靴は携帯やろ！」

b y 月姫

第十二話 — 和葉 —

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ————！————！————！」

へ・・・・・・・・いじ？

平次の声がする。

頭ん中に・・・・・・・・遠くから・・・・・・・・聞こえる。

あたし・・・・・・・・また・・・・・・・・寝てるんかな。

体動かそうとして、まったく動かへんことに気付いた。
何で？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・そや・・・・・・。

あたしは人形の中に入れられたんや。

理由はよう分からへんけど、自分がどこにおるんかがはっきり分かってしもた。

指一本動かせへん体、立ってるんか座ってるんかも分からへん。
それやのに自分の姿が分かる。

あの真っ黒な髪に真っ白な顔した人形や。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・そか・・・・・・・・・・あたしは・・・・・・・・あの
人形に隠されたんや・・・・。

そう思いながら意識を目に持っていくと、ぼんやりと目の前が見え始めた。

女の人・・・？

あたしと同じ年くらいの女性。

視界がはつきりするんにつれて、その人の全体が見えてくる。

瞬きしない目、動かない体・・・ああそか・・・彼女も人形なんや・・・。

レトロな感じのドレスは、昨日、平次の依頼人の奥さんがあたしに着せてくれたものに似てる。

そんなドレープやフリルのぎょうさんあるドレスを着た、栗色の髪の人形は椅子に座ってこっちを見とった。

目線の高さがほとんど変わらへんいうことは、あたしも椅子に座ってるいうことやんな。

思わず足元を見ようとして、首がまったく動かさへんことに改めて気が付いた。

腕、足、指の一本も動かさへん。

口を開くことすら出来へん。

もちろん瞼も。

・・・・・・苦しい。

意識はしっかりしてるのに、動かさへん体はなんて苦しいんやろ。

・・・・・・苦しい。めっちゃくちゃ苦しい。

大きく空気を吸って吐いてみても、いつもやったら感じる自分の鼓動すら分からへん。

もしかしたら、息すら出来てへんのかも。

これが人形……。

これが人形になるということ……。

いやや。

それだけは、絶対にいやや。

今、あたしが感じてるんは今までの恐怖とは違うもんや。

早、ここから出して。

こんなところ、いつまでも居たら気が変になってまう。

「和葉————！！！」

平次！

体は動かせへんけど、音はしっかりと聞こえる。

誰かが……ちやう。

平次が走って来る音や。

平次！平次！

「どこや————！！！！和葉っ！！！」

ここ！

ここや！

足音が近付いてくる。

ここやん！

あたしはここやで！平次！

いきなり視界の前に平次が現れた。

ああ。平次や。

「こんなところにも2体あったんか」

平次はあたしの目の前で、あたしと前に居る人形を見比べとる。

平次！あたしはこっちや！

必死で叫んでるんに、あたしの声は平次には届いてへん。
動かせへん口は声を出してはくれへん。

平次！気付いて！

あたしを早うここから出して！平次！

音に成らへん声は、平次に伝わることは無い。

平次はそのままあたしに気付くことなく、視界から消えて行つてしまった。

代わりに沸きあがって来るモンがある。

平次は絶対にあたしのことを見つけてくれるて信じてる。

信じてる・・・けど・・・。

・・・勝手に広がっていく不安は・・・どうすることも出来へん・・・。

そんなあたしに、あの女の楽しそうな笑声だけが聞こえてきとった。

第十二話 | 和葉 | (後書き)

「救助を待つ」

まさに文字通り。

うーん？ 今回もなんだかシリアスになってしまった・・・はは。

人形の中に隠された和葉姫、はたして若君？ に見つけてもらえるのはいつの日か？

っていつの日やったらあかんがな（笑）

「平次！！ ここやって言うてるのにどこ行くんよ！！ 早、携帯買って来てや！！」

b y p h a n t o m

第十三話 | 平次 |

「かずはーっ!!」

薄暗い邸の中をペンライト片手に駆け回りながら、時々足を止めて叫ぶ。

物音一つしない広い邸は、まるで吸音材でも張っとるみたいにオレの声も足音も吸い込んで、木霊すら返ってこない。

「まったく、どんだけ人形集めれば気が済むんや」

部屋ん中に廊下に階段。

ありとあらゆる所にいる人形。

立っとなるんもおれば、座っとなるんもおる。

中には長椅子に寝そべっとなる人形もおった。

人形なん興味のないオレには、高級そうやとは思ってもそれがどれくらいの価値のあるモンかはわからん。

せやけど、幾つもの人形を見比べてわかった事もある。

顔立ちや衣装の違う何十体もの人形。

その中に、妙に精巧な造りをしとる人形が幾つかある。

殆どの人形がつるつるの肌しとるのにうっすらと産毛が生えとったり、袖やハンカチや扇で隠された掌に細かい皺があったり、本来計算されたバランスで造られとるハズの目鼻立ちが微妙に左右で違ったり。

一言で表すなら、あまりにも『人間くさい』人形。多分、これがあのオンナの言っとった『人形』や。

「こんなところにも2体あったんか」

3階の左側の、他のどの部屋よりも広くて豪華な部屋。

さつき和葉搜した時には気づかなかったが、ヨーロッパ風のアンティークなクローゼットの横の大きな姿見の向こうに、もう1部屋あった。

鏡をドアにした、ヒラヒラしたレトロなドレスやらリボンや羽の飾りのついた大きな帽子やら着物が入っとるんやろう桐の箆笥やらが並んだ衣裳部屋。

その華やかな服の奥、互いに向き合うようにして肘掛のついた椅子に座っとる人形。

1体は、昨日和葉が着とった服によう似たフリルやらレースやらで埋まっとるようなレトロなドレスの、栗色のくるくるとした巻き毛の人形。

もう1体は、年代モンの恐らくは西陣織やろう重厚でいて華やかな振袖を着た、背中まである真っ直ぐな黒髪の市松人形。

1階の階段の影に1体。

1階から2階へ上がる階段の踊り場の左右に1体ずつ。

2階の左側の奥の部屋と右側の2つの部屋に、それぞれ1体ずつ。

3階への階段を上りきった廊下に2体。

そして、この部屋に2体。

これで、見つけた特別な人形は10体。

残りの3体は、多分右側の部屋のどこかにあるハズや。

あのオンナのセリフから拾ったヒントは『13体の人形』。
それが何を意味しとるんか、まだわからん。

人形自体に意味があるんか、それとも人形のおる場所に意味があるんか。

どちらにしろ、残りの人形を見つけてから考えるべきやろう。

市松人形に引っ掛かるモンはあるが、まだ見つけとらん人形にどんなヒントがあるかわからんうちはそちの搜索を優先した方がええ。ペンライトの小さな光しかないが一応人形の奥にはもう壁しかない事を確認して、その部屋を後にした。

「これで全部やな……」

3階の右側、奥から2番目の部屋には、まるでパーティーでもしてるみたいに何体もの人形が思い思いの格好で並んどった。

その中心で、ティーカップの載った丸いテーブルを囲むように椅子に座つとる3体の人形が、オレが捜しとった『特別な人形』に間違いない。

「これでええか」

何も入れた様子のないうつすらと埃を被った空のティーカップを端に寄せて、サバイバルキットからマジックを取り出した。

軽く埃を払った白いテーブルクロスをメモ帳代わりに、この邸の見取り図と人形の位置を書き込む。

サバイバルキットの中の小さなメモ帳はこんな時には使い辛いし、荷物の中には使い慣れた手帳もあるが取りに行く時間が惜しい。向こうが勝手な事しとるんやから、コッチも勝手にやらせて貰う。

「面白い事しておるの」

不意に、背後からオンナの声がした。

反射的に振り向いても、やっぱり姿はない。
ただ、冷たい熱を持った存在感だけがあった。

「この邸の図か。確かに迷うような造りではないが、細かい所までよう覚えておるの」

「煩いわ！黙っとれ！！」

「そう邪険にせずともよかろう？」

「……和葉はどこや？」

「そちが鬼じゃ。隠れておる娘を捜すのは鬼の役目であろう？」
「和葉はどこやて訊いとるんじゃ！！」

楽しげなオンナの声が、オレの神経を逆撫でする。
一気に頭に血が上って噛み付くように叫んだオレに、オンナは心底
楽しそうな囁い声を上げた。

「娘はすぐ傍に隠れておるわ。もうそちにも見えたであろう？」

ひとしきり囁ったオンナが、笑い含んだ声で続ける。

「さ、早う見つけてやるがよい。時はそう残っておらぬぞ？」

オンナのセリフに、ポケットから携帯を引っ張り出す。
時計は、もうすぐ10時半になるところやった。

「そちらのおかげで、退屈の虫も大分消えた。されどまだまだ足りぬ。長の退屈を忘れるまで、我を楽しませてくりゃれ」

神経に触る囁い声を残して、オンナの気配が消えた。
気持ちを切り替えるように強く頭を振って、深呼吸する。

「……置いとる場所に法則性はなし。ドレス着とるんも振袖着とるんも、顔立ちは日本人で見た目には同じくらいの年頃のオンナや言う事以外に共通点はなし。着とるモンから察するに、造られた年代には結構なバラつきがある」

自分を落ち着けるために、1つ1つ声に出して確認する。

オンナの挑発に乗って苛立った気持ちのまま闇雲に動いたら、和葉は絶対に見つからん。

わかつとも、追い立てられるような焦燥感に考える事を放棄して走り出したなる。

「どこにおるんや、和葉あつ!!」

怒りと不安と焦り。

自分の内に鬱積したやり場の無い感情を叩きつけるように、テーブルに拳を振り下ろす。

ごんっという鈍い音と衝撃に、端に寄せておいたティーカップが床に落ちて砕け散った。

おさまらない感情のままに、今度はテーブルクロスを乱暴に払い落とす。

思いつき振り払った腕が黒髪のおかっぱの人形に当たって、座った椅子ごと床に倒れた。

椅子が倒れる重い音に我に返って荒い息を整えながら人形に目をやったオレは、そこにあった光景にすうっと血の気が引くのがわかった。

椅子から半ば投げ出されるように、床に倒れた人形。

すんとした長いワンピースから覗く手足も、乱れた髪の間から見える顔も、割れたカップの欠片で切り裂かれている。

その裂け目から覗いてる、人形の土台部分。

「……人形…やんなあ……？」

確認するために人形の傍にしゃがみ込んで、乱れた髪を払ってサバイバルナイフで頬の裂け目を少しだけ広げる。
そこにあつたものに、思わず息を飲み込んだ。

アンティークな人形の中がどうなつとるんかオレは知らんが、こんな土台になつとるハズがない事だけはわかる。

頬の裂け目から見えた、特別な人形の土台。
それは、人間の頭蓋骨やった。

第十三話 | 平次 | (後書き)

「アイテムを集める」

和葉ちゃんを捜すヒントの『13体の人形』は見つけました。

……人形がちよっとグロ系でごめんなさい(汗)。

「骨格標本か？よう出来とるわ。……って、それより和葉、さっさと携帯の電源入れろや！」

b y 月姫

第十四話　― 和葉 ―

う~~~~~!!

ん~~~~~!!

あかんわ・・・。

やっぱ指一本動かへん・・・。

このままやったら、平次に気付いてもらえへんやん・・・。

『　　どうじゃ　人形になった気分は　　』

あの女や。

ちやう!あのバケモンや!

・・・・・・・・・・ここから出して!!

『　　ふふ　それは我の役目では無いぞえ小娘　　』

・・・・・・・・・・あつ。

あたしの目の前に居る人形が・・・。

『　　よう出来ておるであろう?そちが居るそやつとこれは
我のお気に入りじゃ　　』

今まで身動き一つせえへんかった人形が、優雅とも言える動きで右手を口元に持って行き笑うとる。

声は相変わらず頭ん中に聞こえて来とるのに、まるで目の前の人形がしゃべつとるように言葉に合わせて口も動いとる。

しかも・・・目まで笑うとるんや・・・。

『特にそやつは我が最初に作った人形じゃが もう何百年とその姿のままでおる。羨ましいとは思わぬか？』

羨ましい・・・て・・・人形が？

栗色の髪をした人形はゆっくりと立ち上がり、あたしの方へ近寄って来る。

視界にはその右手があたしに・・・あたしが入れられとる人形の頬に触れて、愛しそうに撫でた。

『年老いて朽ちることは無いぞえ？永劫にこの美しさを保っておれる。そちらが望む永遠の若さじゃ』

頬に触れられている感覚は、あたしには無い。

視界の隅には確かに腕が動いて見えているんに、感触は感じられへん。

人形には、そんなもん初めっから無いんや。

『こやつも我が居るこやつも 鬼に見つけてもらえなんだ哀れな娘じゃ』

・・・ああ・・・やっぱり・・・う・・・なんや・・・。

この人形に入れられてから、沁み込んで来るような悲しい感じは気のせいやなかったんや。

『じゃが我がこのように永劫に愛でておる。愚かな男と

朽ちるより良いであろう？

』

目の前に人形の顔が広がって、楽しそうに笑うた。

『 そうじゃ 今宵は我も楽しんでおるでな そちに一つ
札をやろうぞ。このまま私の新たな人形になると申すなら そちの
男は見逃してやってもよい。どうじゃ 悪い札では無いであろう？
刻限までもう時も露程しか残ってはおらぬぞえ？ 』

．．．．．

平次．．．。

．．．．．あたしが人形になれば平次は助かる．．．．．
．．．。

『 ほれっ どうする小娘 』

あたしが．．．。

シンジテ

えっ？

イトシイヒトヲシンジテ

今の声は．．．。

その声をもっかい聞きたくて、息を殺してみたけど二度と囁いては
くれへんかった。

愛しい人を信じて。

そうや。

あたしは平次を信じて、待ってればええんや。
平次はきつと時間までにあたしを見付けてくれる。

『 愛する男を助けたくはないのかえ？ 』

誰か知らへんけど、おおきにな。

・・・・・・・・・・あたしは平次を待つ。

『 後悔しても知らぬぞ？ 』

・・・・・・・・・・後悔なんかせえへん。平次は必ずあたしを見付けてくれる。

『 どこまでも小賢しい小娘じゃ せいぜい足掻くがよい 』

バケモン女の声が消えると同時に、目の前の人形は糸が切れたように椅子に座った。
さっきは膝の上で手を組んでたのに、今度は両手をだらりと体の横に垂らしたままや。

・・・・・・・・・・。

その姿は何て言うてええんか分からへんけど、違和感がある。
綺麗に着飾って、綺麗なすました顔をして、腕だけをだらしなく下ろしている姿。

自分では腕さえも動かせない存在。

見捨てられた人形・・・。

本当は人間やった人形・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・あたしもあなる
んやろか・・・・・・・・。

あたしも・・・・・・・・。

一度は持ち直した気力も、目の前に現実を見せられると揺らいでま
う。

平次。

平次、平次、平次。

早う来て。

あたしを早う、ここから出して。

そやないと・・・・・・・・・・あたしは・・・・・・・・。

第十四話 | 和葉 | (後書き)

「カードを1枚引く」

引いたカードは使っても使わなくてもよい。

和葉は服部を信じることにしました。

それはね、服部が自分1人だけが助かることを良しとしないからなのさあゝ。(人魚編参考)

死なば諸共……って死んだらあかんがな(笑)

「あんたも探偵やねんから、さっさと来てゝな!! それから携帯は強度がピカイチのやつ買ってや!!」

b y p h a n t o m

第十五話

― 平次 ―

「骨……?」

目の前の光景に、一瞬和葉の事を忘れた。

「まさか……」

倒れた人形の手足についた裂け目にナイフを入れて、少し広げてみる。

剥製とは違って中に何も詰めモンのされとらん人形が、どうやって形を保つとるんかはわからん。

せやけど、そこには紛れも無い『人間の骨』があった。

「人間……なんか?」

あまりにも人間くさい、『特別な』人形。

それは『人間に近づけて造った人形』やなくて、『人間を人形にした』いう事なんか?

「……そんなん、あるワケないやろ」

その考えを否定したくて言葉にしてみたが、声が震えとるんが自分でもわかった。

今までいろんな事件にかかわって凄惨な現場も幾つも見てきたのに、凍りついたように身体が動かせない。

鉛を飲み込んだみたいに胃が重くて、吐き気がしてくる。
それくらい、異質な恐怖を覚えた。

「和葉……和葉捜さな……」

強張った指を何とか動かして、サバイバルナイフをポケットに突っ込む。

力の入らん膝を叱咤して立ち上がろうとした時、しゅるっという衣擦れの音、それこそ普段なら聞き逃してまうやろう小さな音がした。どくんっと心臓が跳ねる。

オレの目の前で、いきなり人形がその形を崩し始めた。

髪と肌が乾いた膜を剥すようにパラパラと落ちて、骨が白い砂みたいにサラサラと崩れる。

まるで今日下ろしたばかりみたいに綺麗やったワンピースも、埃に薄汚れてあちこち痛んどる。

唯一、ガラスの瞳だけが綺麗なままで、塵の中から虚ろに宙を見上げとった。

「愛い人形じゃったに、壊れてしもうたの」

呆然とその様子を見とったオレの後ろから突然響いたオンナの声に、はっと我に返った。

「……人形やと？」

「そうじゃ。それはまだ百年とは経っておらぬ新しいものじゃが、私の可愛い人形ぞ」

「これが『人形』や言うんか？」

「そう言うておろう？この邸には人間共が我に貢いだ何十という人形もおるが、やはり我が手ずから造った13の人形は格別に可愛い。ああ、1つ壊れてしもうたから12じゃったな。何、それもまたすぐ13に戻るじゃろう」

オンナが嗤う。

良く通るその声は、蛇が這い上がるようにオレにねっとりと纏わりつきながら部屋に広がった。

「そうじゃ、そちに1つ言うておく。もう私の可愛い人形を壊すでないぞ。次に壊したなら、そこで終わりじゃ」

「和葉はどこや!？」

「これは鬼が娘を捜す遊びゆえ、見つけるのはそちの役目じゃ。それとも、娘を諦めたのかえ？」

「誰が諦めるかっ!!」

「ならば、捜してやるがよい。ほれ、こうしているうちにも時は過ぎるぞ？」

オンナの声に促されるように、ポケットから携帯を引っ張り出す。デジタルの時計は、既に11時を過ぎとった。

「刻限を過ぎたなら、娘は我が手ずから人形にしてやろう。その暁にはそちにも見せてやろうほどに、楽しみにしておるがよい」

楽しげなオンナの嗤い声を背に、部屋を飛び出す。

どこから捜すかなん、決めとらん。

ただオンナの声から逃れるために、階段を駆け下りた。

「かずはーっ!!」

ワケのわからんモン全てを振り払うように、ハラの底から叫ぶ。

返事なんないんはわかつとるけど、それでも何度か繰り返し叫んだ。

「……どこにおるんや」

上がった息を深呼吸を繰り返して無理やり落ち着けて、頬を流れる汗を拭う。

吐き気がする程の嫌悪感や身体が冷えるような恐怖を何とか押さえ込めたんか、幾分冷静さを取り戻せた。

人形のおる位置には、特に意味を見出せんかった。

という事は人形自身に意味があるハズやけど、さっきの人形は関係なかった。

和葉が隠れとるのに関係しとる人形と、それ以外の人形の違いがどこかに必ずある。

階段の影にある人形と、2階への踊り場にある人形。

2階の部屋にある人形、3階の廊下の人形。

さっきと同じように、もう一度見て回る。

1体、もう1体と見て回るうちに、あの衣裳部屋の奥にあった市松人形がどうしても気になった。

何が引っ掛かっとるんかはわからんが、何故かあの人形と比べとる。

「あと10分」

手の中で震える携帯を黙らせて、時間を確認する。

この邸ん中やと自分で感じとるより時間の流れが早いから、感覚的には多分5分くらいしかないやろう。

「衣裳部屋……やな」

まだ右側のあの部屋に2体の人形があるが、それは無視した。

「人形が、動いとる……?」

照明もない衣裳部屋の奥、開け放した姿見を兼ねたドアの向こうからの頼りない灯りとペンライトの小さな光の中で、向かい合うように椅子に座った2体の人形。

さっき見た時はお嬢様みたいに上品に両手を揃えて座っていた栗色の髪の人形が、まるで遊びに飽きた子供に乱雑に投げ出されたようにだらしなく両手を垂らして、椅子に凭れとった。

「誰が動かしたんや？」

この邸におるのは、オレと和葉とあのオトコと姿を見せんあのオンナだけのハズや。

もし他の誰かが入り込んだとしても、人形を1体動かしたただけで消えるなん、ありえん。

だとすると、この人形を動かしたんは、恐らくはあのオンナや。

せやったら、何故あのオンナはこの人形を動かした？

「……和葉？」

栗色の髪の人形と向かい合わせに座っとる、華やかな振袖を着た市松人形。

この人形が、隠れとる和葉や。

「オマエが和葉やな？」

人形はぴくりとも動かんし、表情1つ変えん。

ガラスの瞳もただ光を反射しとるだけやったけど、オレにはこの人形があのオンナが捜せ言うてた和葉やと確信した。

丁度その時、邸の裏手から鐘の音が響いてきた。

「これが和葉や！聞いとるか！？この市松人形がオレの和葉や！！」

そう言い切ると同時に、何かがオレの身体に巻き付いた。
次の瞬間、オレはしたたかに床に叩きつけられとった。

第十五話 | 平次 | (後書き)

「カードを使ってアイテムを交換する」

引き続き、ホラーなお約束のグロ系人形ですみません(汗)。
やっとなと和葉ちゃんと再会……直前です。

「こんなトコにおったんかい。携帯はどうしたんや？」

b y 月姫

第十六話 | 和葉 |

バケモン女が消えてから、突然視界が真っ黒になった。

もしかしたら、ここは初めから暗かったんかもしれない。
そんな風に感じられるくらいの暗闇やった。

・・・・・・これやったら・・・・。
・・・・・・こんな暗かったら・・・・。

平次にあたしが見えへんかも・・・・。

やけど・・・・やけど・・・・あたしは平次を信じてるから平気や。

信じて待ってるんや。

そう、あたしは平次を待てばええだけや。

・・・・・・いつまでも。

閉じることの出来へん視界。

真っ暗なんは暗闇やから、それともあたしが目の前の姿を見た無い
と思ったから？

相変わらず動かへん体に、心まで闇が入ってしもたかもしれへん。
ここに入られてから、どんくらいの時間が経ったんやろ。
ほんまは、あたしはとくに人形にされてるんやないやろか。

平次。

平次はどこにおるん？

あたしの頭は、もうちゃんとは働いてないかもしれない。
このまま・・・眠ってしてもええ・・・かな・・・。

「……和葉？」

・・・い・・・じ・・・？

「これが和葉や！聞いとるか！？この市松人形がオレの和葉や！！」

確かに平次の声や。

この市松人形がオレの和葉や！　　って言うた・・・。

あつ。

平次があたしを見付けてくれたんや！

そう思うて意識を目えに持っていたときには、あたしは再びあの
不気味な洞窟に戻されとった。

それなのに・・・あたしの前には・・・平次・・・
・・・と・・・あたし？

平次は、平次は苦しそうに膝を付いて片手でお腹ん辺りを抑えとる。
どうしたんやろか？

どっか怪我でもしたんやろか？

平次！

思わず平次の側に駆け寄ろうとした。

ううん。気持ちだけは平次の元へ行ったはずや。

やけど、やっぱ人形の体は微塵も動いてはくれへんかった。

「和葉・・・。」

平次は椅子に座ったまま眠つとるようなあたしに近付いていく。

あたしの両手を握って、

「和葉！和葉！」

って名前を叫んどる。

平次！あたしはこっちや！

闇の中で炎に照らされた平次は、よう見たら泥だらけで腕には血が滲んどるようやった。

あたしはまだ、人形の中におんの！

気付いて！平次！

「なんじゃ、小娘は目覚めんのかえ？」

・・・。。。

そんな・・・。

「せっかくそちが見付けてやったのにのう」

なんで・・・。。。

なんで・・・。。あたしが居る人形が・・・。。。

「可愛げの無い小娘じゃ」

まるで人間の様にしゃべってんの・・・・・・・・あたしが居んのに・
・・・・・・・・。

右手を口元に当てて、左手で振袖の裾を押さえて笑うとる。

あたしがどんなに叫んでも、人形の表に出ることが出来へんのに。

なんでなん！

約束が違うやんか！

平次は時間までにあたしを見付けてくれたやんか！

それなんになんて！

「和葉に何をしたんや！！」

人形の目を通した視界の中で、平次はしっかりとあたしの体を腕に抱きしめとった。

「オレは約束は守ったで！時間までに和葉見付けたやろが！！」

「何もしてはおらぬ。ほれ、その証に娘はそちに返してやっておるではないか」

何言うてん！！

あたしはまだここやんか！！

「恨めしいがの今宵はそちらの勝ちじゃ。もう顔も見とう無い。早々に立ち去るがよいぞ」

カワエロが平次の前に現れて、即すように右手である方向を指して

歩きだした。

ちらっとそれに目をやってから、平次は再度あたしが居る人形を睨み付けたんや。

目が合つとるのに・・・。

平次にはあたしが分からへん・・・。

何か言いたそうやったけど、唇噛み締めるようにして体の向きを変えてしもた。

その腕にあたしの体を大事そうに抱えて。

血が滲む腕で、痛むであろう腕で。

やけど・・・それはあたしであってあたしでないんや・・・。

あたしはここや！ここに居んのに！

待って！！

行かんというて！！

平次！！

第十六話 | 和葉 | (後書き)

「詐欺にあう」

騙されるか、見破るかは次に回すルーレット次第。

やっと再会出来たのに、ごめん服部(笑)

「携帯は壊れたって言うてるやんか! あっ! あん中に秘蔵写真があったのに……。」

b y p h a n t o m

第十七話

― 平次 ―

「……っ」

鈍い衝撃と鋭い痛みに、一瞬息が詰まった。

右手を床について、身体を起こす。

掌に感じたのは、床やなくて岩の感触やった。

「っ……っ」

痛むんは、左の脇腹と左腕。

骨までやられたような痛みやないし、内臓に響くほど強く叩きつけられたワケやないから、ハラはただの打撲やろう。

左腕も、擦り傷程度でさして深い傷やない。

こっちは、Tシャツしか着とらんかったんが敗因や。

1つ息をついて、ゆっくりと辺りを見回す。

どこをどう移動させられたんかはわからんが、オレが落とされたんは、岩に囲まれた地下の洞窟みたいな所やった。

さっきまでいた邸よりも更に暗い、じつとりと肌に張り付くような、息苦しささえ感じる程の、生臭い湿気のこもった洞窟。

所々にある松明の灯りはぼんやりと物の形がわかる程度で、足元を見るんが精一杯や。

そんな中で、1か所だけ浮き上がるように明るい場所。

そこに、和葉がいた。

「和葉……。和葉！和葉！」

布張りのアンティークな椅子に凭れるようにして、死んだように眠
つとる和葉。

胸はゆっくりと上下しとるから息はあるし、掴んだ両手は確かにい
つもの和葉の体温なんに、いくら呼んでも起きる気配もない。

「なんじゃ、小娘は目覚めんのかえ？せっかくそちが見付けてや
ったのにのう。可愛げの無い小娘じゃ」

背中から聞こえたオンナの声に、勢い良く振り向いた。

そこにいたのは、椅子に座ったあの市松人形。
まるで人間のオンナみたいに、振袖の袂を押えながら口元に手を当
てて笑つとる。

普段のオレやったら一体どんなカラクリなんかと興味津々で観察す
る所やけど、あの人形がどんなモンか知つとる今は、鳥肌が立つほ
どの気味悪さしかない。

自分があちこち泥だらけなんも忘れて、思わずあの市松人形から隠
すように和葉を抱き締めた。

「和葉に何をしたんや！！オレは約束は守ったで！時間までに和葉
見付けたやろが！！」

「何もしてはおらぬ。ほれ、その証に娘はそちに返してやってお
るではないか」

洞窟ん中、オレの声は四方に反響しとるんに、オンナの声はどこま
でもクリアに闇に吸い込まれていく。

確かに、和葉はここにおる。

せやけど、まだ何かが足りん。
大事な何かが、欠けとる。

オレの腕ん中の和葉を指差しとる市松人形を、正面から睨みつける。
松明の灯りのせいか、楽しげに笑った口元とは対照的に、ガラスの瞳は暗く沈んどった。

「恨めしいがの、今宵はそちらの勝ちじゃ。もう顔も見とう無い。
早々に立ち去るがよいぞ」

どこに隠れとったんか、オンナが手を振るとあのオトコがのっそりと暗闇から現れた。

一瞬そっちにやった目を、すぐに市松人形に戻す。

拗ねた子供みたいにつまらなそうにオレを見とる人形の目が、何故か引っ掛かった。

光を反射しとるだけの、作り物のガラスの瞳。

せやけど、それだけやない何かを感じる。

それが何なのかが今一つ掴みきれんまま、和葉を抱き上げて人形に背を向けた。

「さ、こちらへ」

先導するように、オトコがオレの前を歩く。

この場所のせいか、それともペタペタとした足音のせいか、最初に会った時とは随分と印象が違う。

最初に会った時はどこかヘンやと思いながらも『人間』に見えとったのに、今は昔話に出て来る『河童』にしか見えん。

もしかして、あの時和葉が氣い失ったんは、このオトコが『河童』

に見えたからなんか？

せやったら、あの『お嬢』言われとるオンナは？

そもそも『河童』なん空想上の生き物にすぎんけど、あの『特別な人形』は確かにオレがこの目で見たモンや。

何より、偏屈で頑固な年寄りならまだしも、声から察するにまだ若いだろうオンナが、こんな電気も通つとらん電話線も引いとらんような朽ちかけた邸に住んどる事自体がおかしい。

……『人間』やない？

そんな事あるハズないんに、そう考えれば何もかも辻褄が合う。ほんなら、今オレが抱いとる和葉は？

この『身体』が和葉なんは間違いない。

せやのに、何かが足りん。

足りないモンは……？

「そろそろ雨も上がるようですぞ。お荷物は玄関に運んでおきましたので、朝までお休みになるもよし、早々に出立されるもよし、お好きになさって下さい。今宵は、お客人のおかげでお嬢は久方ぶりに楽しまれたご様子。人形は手に入りませなんだが、新しい玩具はお手元にありますゆえ、暫くはご機嫌も良い事でしよう」

オトコが低く囁う。

そのセリフに、オレン中で何かがブチっと切れた音がした。

「ちよお待ってくれや」

「はい？」

振り向いたオトコの鳩尾目掛けて、思いっきりケリを入れる。
墓蛙みたいな声を上げて、オトコが仰向けに引っくり返った。
起き上がるヒマも与えずに、ハラを踏みつける。

和葉抱いたまんまやから多少狙いは甘くなっただけど、人間ならアラの2、3本も折れて内臓にもちよつとばかりダメージが出るからぐったりするハズやのに、オトコは苦しそうにしながらもバタバタと暴れとった。

「ふざけんなや」

オレの足を掴もうとした手を蹴り飛ばして、踵に体重を乗せてもう一度ハラを踏みつける。

人間なら間違いない入院コース、ヘタすればあの世行きやけど、構わん。

ハラを抱えて丸まっとるオトコを無視して、今来た道を駆け戻った。

さっき、和葉がいた場所。

あの市松人形がいた場所。

そこにいたのは、真っ白いオンナやった。

裾の長い真っ白な着物。

腰よりも長い真っ直ぐで真っ白い髪。

ぬめりような光沢を持った真っ白い肌。

血のような緋色の瞳と唇だけが、オンナの持った色やった。

「どうした？カワエロとはぐれたのかえ？」

「いや、忘れモンしてな、取りに戻っただけや」

「ほう、忘れ物とな？」

オンナの紅い唇の間から、紅く薄い舌が覗いた。

「……和葉返せや」

「娘なら、そちが抱いておろう？」

「『身体』だけやなくて『中身』も、きっちり耳揃えて返せ言うてんねや！」

「何の事じゃ？」

「トボケんなや」

オンナの印象は『白蛇』。

その爬虫類のような瞳を睨みつけながら、顎で市松人形を指し示した。

「そこに和葉おるんやろ？元通りの和葉を返せ」

第十七話 | 平次 | (後書き)

「1つ戻る」

ゴール前にちよつと後戻り。

これまたお約束で、お嬢は『真っ白な大蛇』でございます。

見た目は女盛りですが、本当の年齢は恐くて訊けません(汗)。

「さっさと起きろや、和葉! いつまで寝とんねん! ?」

b y 月姫

第十八話　― 和葉 ―

平次！

行かんといて平次！

ああ・・・。

闇ん中にあたしを抱きしめた平次の姿が消えてしもた。

「今宵はほんに楽しいのう」

どこまでも沈みそうなあたしの気持ちとは違くて、女の声は本当に楽しそうやった。

もうその声に逆らう気力すら残ってへん。

「男など詮ずるところこの様なものよ。どうじゃそちも解したであらう？」

女は人形をさっきまであたしの体がおった椅子に座らせた。

「そちはもう我のものじゃ。器が手に入らなんだは口惜しいがの、時には趣が違うのもまた一興じゃ」

頭が割れそうな程に、女の笑声が響いてくる。

そんな声が薄れると、体の力が抜けるみたいに人形がまた動かんようになつてしもた。

「その器をそちに供してやろう」

闇ん中から、今度は白い女が現れたんや。
真っ赤な目えに真っ赤な口、それ以外は真っ白な女。

「異存などあるまい？そやつは”小野小町”と言う称にて、人間
共にも殊の外愛でられておったでの」

女がとんでも無いことを言うた気がしたんやけど、あたしにはもう、
そんななんでもよかった。

もう考えることを止めようと思った時、微かやけど音が聞こえてき
たんや。

女の声しかせえへんかった、この湿った空間に。
それは段々とはっきりした音になった。

足音や。

それも走つとるような。

荒い息遣いまで、聞こえるほどに近付いて来る。

「どうした？カワエロとはぐれたのかえ？」

「いや、忘れモンしてな、取りに戻っただけや」

ああ。

平次や。

帰って来てくれたんや。

平次。

平次。

「そこに和葉おるんやろ？元通りの和葉を返せ」

平次はあたしがここにおるって、気付いてくれたんや。

静かな声やったけど、そこには平次の気持ちがぎょうさん込められ
とるようやった。

あたしの後ろにおる姿は見えへんけど、平次の気持ちは伝わって来
る。

「 懷疑の多い男よのう。そこに申すならそちが見定めるがよかろう
？」

女は楽しんでるんや、この状況を。

あたしらが必死になってるんが、楽しくて堪らへんて感じや。

「 じゃがそやつに幾許の傷でも残してみよ、そちも小娘も我が直
様喰らうてやるぞ 」

吊り上げられた女ん口元にちよろちよろ出とる舌は、蛇特有の先が
2つになったもんやった。

「ほな和葉返して貰うで」

女の姿を遮る様に平次があたしの前に現れた。

腕にしっかりとあたしの体を抱きしめたままで。

やけど、その顔はさっきまでの恐い顔やなくて、とても優しいもん
やった。

「戻って来い和葉」

言葉と同じ優しい口づけ。

人形にしてるはずなのに、その温かさが伝わって来るみたや。

「オレんどこに戻って来い和葉」

平次……。

帰りたい。

あたしも平次の側に帰りたい……。

そんな時、意識がふわうっとなつて、体が浮くみたいな感じがした。

ミツケテクレタ

アノカタガワタシヲミツケテクレタ

この声はあん時の……。

やけど、あん時みたいに悲しそうやない。

嬉しゅうて嬉しゅうて溢れた想いがあたしにまで入ってくる。

この人は人形にされてからもずっと、愛しい人が自分を見付けてくれるのを待ってたんや。

イマイチドアナタサマノオソバニ

あたしが平次の腕の中で目を開けた時には、その人形は塵のように儚く消えていった。

”アリガトウ”って、最後にそう聞こえた気がした。

「平次・・・ありがとう・・・」

やからあたしは彼女の気持ちをそのまま言葉にして、平次に伝える。

「おう」

平次の短い返事にも、いろんな想いが込められてるはずや。

あたしはお礼のキスを返そうと平次の首に腕を回した。

そこで・・・気付いた。

あの白い女がいてへんことに。

平次も突然動きの止まってしもたあたしを不振に思たんか、あたしを抱いたまま振り返ったんや。

2人して炎が薄く揺れるだけの闇を見る。

そのさらに奥ん闇で、何かが動く気配がした。

第十八話　― 和葉 ―（後書き）

「復活する（病気・破産・離婚者に適用）」

祝！和葉復活！（笑）

おおー！あの市松人形は”小野小町”だったのかあー！

って実際の小野小町は市松人形のような振袖ではなく、十二単だったような・・・平安の人だし・・・。

振袖はお嬢の趣味と言うことで・・・あっ・・・もしかして・・・眉もマロ眉か？（笑）

それにしても・・・お嬢・・・何歳？??

「キスしてくれたら起きてもええよ！！って平次！あんた誰にキスしてんの！！」

b y p h a n t o m

第十九話 | 平次 |

「懷疑の多い男よのう。そこに申すならそちが見定めるがよからう？　じゃがそやつに幾許の傷でも残してみよ、そちも小娘も我が直様喰らうてやるぞ」

オンナの紅い唇が、ゆっくりと笑みの形に変わる。

美人なん、それこそあちこちで見慣れとるオレの目から見ても『綺麗』なオンナやのに、いや、それやからこそ、その笑みには背筋が凍りつきそうなほどの凄みがあった。

氣い弱いヤツやったら、それこそ固まったまま動けなくなるやろう。せやけど、今のオレには効かん。

「ほな和葉返して貰うで」

オンナを無視して、市松人形の前に膝をつく。

人形は椅子に座つとるから、オレが少し見上げるような格好になった。

「戻って来い和葉」

どうしたらええんかなん、わかつとつたワケやない。

ただ、自然に身体が動いて、市松人形の綺麗に紅のひかれた唇にキスしとつた。

この人形も、昔はきつと人間のオンナやつたんやろう。

いつの時代に生きてたんかはわからんが、家族も恋人も友人たちも、彼女を知る人たちは皆とうに亡くなって、ただ1人時間に置き去りにされたようにその姿だけを残されてきた哀れなオンナ。

そう思うと、3階のあの部屋で見た時のような気味悪さは無かった。

「オレんどこに戻って来い和葉」

和葉を抱いたまま、人形に語りかける。

どこを見とるんかわからんガラスの瞳が、オレを見下ろしとるよう
に感じた。

オレが他のオンナにキスしたて知ったら、和葉がどんな反応するや
ろか。

こんな時なんに、ふとそんな事を思いついた。

相手が人形やからとか非常事態やからとか、とてもそんな言い訳が
通じるとは思えん。

せやけど、ちゃんとオレんトコに戻って来るんなら、平手の1つや
2つは甘んじて受けたるわ。

腕ん中の和葉を、ぐっと抱き締める。

人形のガラスの瞳が、涙で濡れたみたいに光を弾いた。

次の瞬間、人形はまるで乾いた砂山を風が吹き散らすように、さら
さらと崩れて消えた。

残ったのは、古ぼけた振袖とガラスの瞳。

「平次……」

腕ん中から聞こえた小さな声に抱き締めてた力を緩めると、和葉が
目を覚ましとった。

「ありがとう……」

「おう」

たったそれだけの会話やけど、気持ちはいっかり伝わったと思う。

和葉は取り返した。

あとはここから出るだけや。

不安があるとすれば、あのオンナが素直に教えるかどうか……。

頭の中でこの後の事を考えた時、オレの首に腕を回した和葉がそのまま固まった。

和葉の視線は、オレの後ろに向かってる。

何があるんや？

和葉を抱いたまま、ゆっくりと振り返る。

オレの後ろ、ついさっきまでオンナがいたハズの場所には、奥に続く深い闇が広がってた。

息を殺して、地の底から染み出るような闇を見やる。

松明の灯りも届かない闇の奥から、ずるり、と何か重く湿ったものが動く気配がした。

「和葉……立てるか？」

「……うん」

抱いていた和葉を支えて、立たせる。

眠った身体を目覚めさせるように軽く手足を動かした和葉は、すぐに自分の足でしっかりと立ち上がった。

「大丈夫、走れるよ」

オレの考えてる事がわかったんやろう。
足元を確認するようにしとった和葉が、促すようにオレの手を握る。
その小さな手を握り返して、さっきあのオトコに案内された道を走り始めた。

ここはあのオンナのテリトリーや。

相手の正体もようわからん上に勝手もわからん場所でのケンカは、あまりにも分が悪い。

どこにも逃げられんのならハラ括って対峙もするが、他に手があるならそっちを選ぶべきや。

無茶と無謀は違う。

引く時に引けんヤツには、大事なオンナ1人護る事なん出来ん。

「和葉」

「何？」

薄暗い松明の灯りとペンライトの小さな光では十分な明るさが得られんから、走るとは言っても精々が小走り程度や。

会話に不自由する程には息は上がらん。

「オマエ、ここにはどうやって連れて来られたんや？」

「アタシは、あの部屋で何かに思いつきり引っ張られて、気が付いたら鏡だらけのヘンな所に居ったんよ」

「鏡だらけ？」

「うん」

和葉の言う鏡は、マジックミラーみたいに向こうが透けて見えるモンらしい。

それが壁一面に嵌め込まれとって、部屋にあった鏡や人形の目を通

して邸ん中を映し出しとったと。

和葉が消えた部屋には、大きな姿見があった。オレが引っ張り込まれた時には、目の前に人形がおったし鏡の裏面にいた。

キーは『鏡』か？

さっきあのオトコと離れた場所には誰もおらんかったが、脇道もない1本道やったから、そのまま進む。ごつごつした岩肌の一方が滑らかになった場所に出た時、少し先にあのオトコの姿を見付けた。痛そうにハラを抱えとるが、オレが思った程にはダメージを受けとらんようや。

「おい！」

オレの声に驚いたんか反射的に逃げ出そうとしたオトコのザンバラ髪を引っ掴んで、引き戻す。

ついでに思いつきり脛を蹴りつけた。

オトコが、声も上げずに足を抱えて蹲る。

人間にとつての弱点は、コイツにとつてもそれなりに効くらしい。

和葉は、最初にこのオトコ見た時みたいに氣い失ったりはしとらんが、繋いだ手が震えとるんがわかった。

「出口はどこや!？」

「……それは、言えませんか」

オトコのセリフに、またオレん中で何かがぷつんと切れる音がした。

オレら使って勝手なルールで遊んどったクセに、負けを認めんと悪足掻きして、まだ和葉を恐がらせとる。

オレの頭ん中から容赦や手加減で単語を消すには、充分やった。

「和葉、ちよお目え閉じとけ」

繋いだ手を引っ張って、和葉を背中に回す。

後ろからはあの不気味な気配が追って来てたが、和葉は素直に従った。

「出口はどこやて訊いてんねや」

脛を押えて蹲っとるオトコの髪を掴んで、無理やり立たせる。

口を開こうとしないオトコを、壁に叩きつけた。

ごんっと鈍い音がしたが、滑らかな岩肌やと大してダメージはない。

「オレが大人しゅう訊いとるうちに答えろや」

「……言えませんか」

「フン、せやったら、コッチも勝手にさせて貰うわ」

オトコを引き倒してハラを踏みつけると、ポケットからサバイバルナイフを引っ張り出した。

「ケリが効いとる言う事は、こんなモンでもそれなりに効果があるやろ。実はな、この『遊び』とやらが始まってからずーっとイラついてな、ストレス発散しとうてしゃーないんや。ここから出られんのやったら、オマエ使って晴らさせてもらうわ。丈夫そうやから、長く楽しめそうやし。ついでに、邸ごと消し炭にして、あの人形たちも道連れにするか。そんなくらいの事やったら、手持ちのモン

だけでも充分に出来るしな」

「……人間のする事ではありませんぞ」

「何や、知らなかったんか？この世の中で一番恐くて残酷なのは『生きとる人間』なんやで？」

サバイバルナイフの重さを量るように片手で弄びながら、足の下のおトコに笑って見せる。

思い当たる節があったんか、おトコの目に怯えが浮かんだ。

「出口はどこや？」

「それは……」

おトコの怯えた目が、滑らかな岩肌の少し先に向かう。

そこにあつたんは、松明の炎を鈍く映し出しとる鏡。

大きさも形も違う鏡が幾つも岩肌に埋め込まれとって、その先に何十と繋がつとるようやった。

「鏡？」

「あ、アタシが連れて来られたところや……」

『鏡』に反応したんか、オレの背中から顔を出した和葉が奥を指差した。

「『鏡』が全てのカラクリやったってワケか」

観念したんか、おトコはオレの足の下敷きになったまま、大人しくなった。

「出口はどこや？」

「……鏡ならどれでも、邸に通じております。けれど、そう簡単

には出られませんぞ」

「そんなん、アンタが案内すればすむ事やろ？」

オトコの脇腹にケリを入れて、立つように促す。

ふらふらと立ち上がったオトコが、よろよろと歩き出した。

オレらを追って来とる気配は、息遣いも感じ取れるくらいに近づいてくる。

松明の灯りが、滑らかな岩肌にそいつの影を薄く落とした。

第十九話 | 平次 | (後書き)

「コマンドを選ぶ」

ラスボスが現れた

戦う

↓ 逃げる

戦略的撤退を選んだ平次です（笑）。

「帰るで。忘れ物はないか？」

b y 月姫

第二十話　― 和葉 ―

平次が本気でキレとる。

「和葉、ちよお目え閉じとけ。」

そう言われて平次の背中で素直に目え閉じたんやけど、声は聞こえるやん。

「オレが大人しゅう訊いとるうちに答えろや」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そんなんかいの事やったら、手持ちのモンだけでも充分に出来るしな」

「何や、知らんかったんか？この世の中で一番恐くて残酷なんは『生きとる人間』なんやで？」

これは冗談なんかやない。

きつと全部本気や。

今の平次は、自分が犯罪者になってもええ位の覚悟でおるはず。

他の人やったら、こんな平次見たら恐なってしまふやろな。

いつもん姿とあんまりにも違うてるから。

そやけど、あたしはこんな時なんに、嬉しいて思うてまう。

やって、これはあたしを守る為やから。

平次の声が、背中が、絶対助けたる！って言うてるから。

「鏡？」

平次の声が、ひとり浮かれとったあたしを現実に呼び戻した。

「あ、アタシが連れて来られたところや……」

ここに連れて来られて、1番最初におった鏡のぎょうさんある場所や。

平次はカワエロを立たせると、先に行け！言うように鏡らの方を示した。

「玄関に1番近いとこやで。」

カワエロは恨めしそうに振り返ったんやけど、

「さっさとせえ！」

と平次に怒鳴られて、そそくさとある鏡の前に向う。

「逃がしはせぬ」

その後を追うように平次に手を引っ張られて前に進もうとしたら、女の声がした。

ズルッ。

あたしは振り返らんでも、その姿が分かる。

ズルッ。

さっき見てしもうたから。

ズルッ。

それに……それに……映つとる。

ぎょうさんある鏡が、女の正体を映し出してるやんか。

平次が信じられへんモンを見るように鏡ん中のその姿を見詰めとる。

白い・・・真っ白な・・・蛇。

蛇言うより大蛇言うんやろな。

あたしらなんか丸呑みしてまいそうなくらいの大きさや。

真っ赤な目えと同じくらい真っ赤な舌も不気味さを増大させとる。

恐さが限界を超えると、人間て意外と開き直れるもんやな。

あたしは周りの様子をやけにリアルに捉えることが出来とった。

「ここからは出さぬ」

頭が割れそうな程の音が響く。

平次も一瞬、右手を頭に持ってた。

カワエロは、まさに蛇に睨まれた蛙や。

全身をビクビク震わせて、ある鏡の前で固まってしもてる。

あの鏡ん中・・・。

・・・あれは。

「平次！あの鏡や！」

あれは、あたしらが始めに入ったあの真っ赤な部屋や。

あたしの声で我に返った平次は、あたしの手を一度強く握り直してから走り出した。

カワエロを押しつけ鏡に触れる。

「！」

うそ・・・。

普通の鏡やんかこれ・・・。

「くそっ！」

平次は鏡の表面を割れんばかりに殴り付けとるけど、通れるどころか罅の一つも入らへん。

「うぬら人間だけでは通れはせぬぞ」

嘲笑う声。

鏡に映るあたしらの後ろに、白い胴体が写っとる。

「せやったら。」

平次は蹲つとるカワエロを無理矢理立たせようとしたんやけど、

「おっ・・・お許しを・・・」

と叫んで逃げ出してしもた。

「おいっ！こらっ待たんかいっ！」

「カワエロは我には逆らえぬ、諦めるがよい。ふあはははは」

さつきよりも甲高い笑声。

ズルッ。

少しずつ少しずつ、あたしらとバケモンの距離が狭うっていく。

ズルッ。

平次はあたしを鏡の方にして背中に隠してくれた。

あたしが直接、バケモンを見なくてもええように。

それなのに平次は真っ直ぐに、バケモンを見据えとる。

平次かてほんまは恐いはずや。

こんな現実離れたモン相手なんやから、こんなありえへんバケモン相手なんやから。

それでも、平次はあたしを守ってくれとる。

あたしは・・・。

あたしはどうしらええ・・・。

あたしはどうしたら平次を助けられるん・・・。

バケモンは直ぐには襲っては来えへんみたいや。

蛇は獲物をゆっくりと追い詰めて相手が弱るのを待つ、いうて何かで読んだことがある。

こんな息も出来へん状態がいつまで・・・。

あたしはどうしたらええの・・・。

あたしらは鏡の前をゆっくり、バケモンから少しでも逃げられるように動いとる。

やけど・・・このままやったつら・・・。

誰か……。誰か助けて！！

あたしが平次の背中に顔を押し付けて強く願ったとき、背後からいきなり腕を捕まれ、そのまま凄い力で引っ張られたんや。

「えっ?!」

突然のことやったけど、あたしは掴んどる平次の腕だけは絶対に離さへんかった。

一瞬視界が歪んで、次の瞬間には元に戻ったんやけど。

ここは……。

目に映るんはバケモンが居った生臭い場所やなく、あたしが居ったあの小さな部屋やった。

そして。

あたしの腕を掴んどったんは、あの、栗色の髪した人形やったんや。

「あんたが……。助けてくれたん……。」「

動かへん体を無理矢理動かしたんやろ、あっちこっちが変な方向に曲がってしもとる。

この人も、あの人と同じなんや。

好きな人の側に帰りたいんや。

あたしは何の迷いも無く、そう想うた。
そして、

「平次。彼女にもキスしてあげてくれへん。」

自分でも信じられへん言葉が出とった。

平次も目え見開いて驚いとる。

そやけど、躊躇つとる時間なんかかったんや。

「我に齒向かうつもりかえ？ことのほか愛でてやった我に」

女の声が響くと同時に、背後にあつた鏡から白いモンが伸びて来て人形を絡め取ってしもたから。

もうすでに壊れかけとった人形は、嫌な音を立ててさらに壊されていく。

「平次！早う！」

このままやったら、彼女は好きな人んとこへ行けへん。

平次もあたしの気持ちが分かってくれたんか、屑居れそんな人形の頬に手を当ててキスしてあげてくれた。

そして人形は壊される前に、塵となって消えていった。

好きな人の元へ返ったんや。

「和葉・・・お前・・・。」

「ええんや。」

平次は何か言いたそうやけど、あたしは笑顔でそれを止めた。

ええんや。

今回は特別やから。

人形が消えると、白いモンも居らんようになった。
やけど安心なん出来へん。

あたしらはそれからすぐに、この部屋を飛び出したんや。

第二十話 | 和葉 | (後書き)

「助っ人に報酬を払う」
うっ……。

和葉が……和葉が服部にあんなことを言うなんて……。
他の女(人形)にキスしろなんて……ありえへん(怒)
でも、人形チュウって魅力的……うっとり(笑)

「平次、忘れたあかんよ。キスする相手が、後10人いてるんやで。」

b y p h a n t o m

第二十一話 | 平次 |

古ぼけて痛んだアンティークドレスとガラスの瞳だけ残して、オレの目の前で塵なくなって消えた人形。

和葉が何で人形にキスするようにオレを促したんか、何でオレのキスで人形が消えたんか、本当の所はようわからん。

せやけど、喉の奥に小骨が引っ掛かつとるような違和感が残ったものの、和葉はこの状況に納得しとるし、あの洞窟から邸に戻れたから、深く考える事はやめた。

和葉の手を引いて、部屋を飛び出す。

この邸もあのオンナのテリトリーやから、また何か仕掛けて来る前に一刻も早く外に出たかった。

「……平次」

「何や？」

階段を駆け下りながら、和葉がオレの手を引っ張った。
足は止めないままに、声だけで返す。

「人形……」

「人形がどうした？」

1階と2階とを繋ぐ階段の踊り場、中空を見つめとる人形の前で、和葉がオレを引っ張るようにして足を止めた。

「あの人形、元は人間やったって言うたら、信じる？」

「ああ、そうみたいやな。どんなカラクリなんかわからんし信じた

ないけど、あのオンナが言うてた『特別な人形』が人間の骨格持つとったんはこの目で見た」

「じゃあ、何で人形にされたかは知っとる？」

「あのオンナが仕掛けたゲームに負けたんやろ？」

「うん……」

和葉が口ごもる。

和葉が何でそんな事を言い出したんかはわからんが、とにかく今はここから逃げるのが先や。

玄関はすぐそこやし、もし万が一ドアが開かなくても、大きなステンドグラスを割れば出られるやろう。

「行くで」

また走り出そうとしたオレの手を、和葉が振り払った。

「和葉!？」

「あの人形たちな、もうずっと長い間、自分を見付けてくれるのを待ったんよ。こんな寂しいトコで、ずっとずっと待ったん」

「それがどうしたんや？」

「あの人形たちが待つとる人は、もういないんよ。どんなに待っても来てくれへん恋人をずっと待つとるやなんて、かわいそうやん。せやから……」

今にも泣き出しそうに眉を寄せた和葉が、きゅっと唇を噛み締めて俯く。

ようやく、違和感の正体がわかった。

人形へのキスを促した和葉と、塵になって消えた人形。

人形にされた身体にしがみついてまで待ち続けたオンナは、あのキスを恋人からの迎えやと錯覚したまんま身体への執着を手放した。そして、ただの器となった人形は、今まで滞っていた時間が一気に押し寄せたように朽ちた。

非科学的やけど、そう考えれば納得もいった。

和葉は、たとえ嘘や誤魔化しでも、それで救われるんならそうしてやって欲しいと言いたいんやろう。せやけど、オレにはそれが慰めになるとは到底思えんかった。

和葉の腕を掴んで、無理やり歩かせる。

「平次！」

「……オマエは誰を待ったんや？」

「え？」

「あのオンナに捕まっとった時、誰を待った？」

足元に注意がいつとらん和葉が階段を踏み外さんように、一段一段ゆっくりと降りる。

ギシッギシッと床が撓む音に重なってオレらの後ろで小さな足音がしたが、気付かないフリをした。

「オレを待ったってくれたんやろ？それとも、解放してくれるんやったら誰でも良かったんか？どこの誰ともわからんオトコの情のないキスで誤魔化されるつもりやったんか？」

「そんな……」

「オレは、和葉やから搜したいと思った。和葉やから、どんな事しても取り戻したいと思った。そら、助けを求められれば誰にやって手え貸すし力になったろうとも思うけど、それは余力があればや」

階段を降りきると、荷物が置かれた玄関に急いだ。きっちりと閉じられたドアは、まるで1枚の板のように、びくともしない。

ドアを背にして振り向くと、踊り場で椅子に座ったハズの人形が階段の上からオレらを見下ろしとるんが見えた。

「オレを待つとるワケやないし生きとるワケでもないオンナのため
に危ない橋渡る気なん、さらさらない。オマエが傍に居るんなら尚
更や」

姿も見えんし声も聞こえんけど、あのオンナの気配が濃くなってき
とるんがわかる。

掴んだままの和葉の腕には多分、オレの手の形に痣が出来とるやろ
うけど、力を緩める事は出来なかった。

「ハタから見れば勝手に冷たいオトコやて思われるんやろうけどな、
誰に何と言われようと構わん」

自分を落ち着けるように大きく深呼吸をして、玄関横の大きなステ
ンドグラスに目をやる。

金属で繋がれとる色とりどりのガラスは結構厚みがありそうやっ
たけど、身体ごと思いつき荷物を叩きつければ割れるやろう。

「オレが何もかも投げ捨ててでも護りたいと思うんはオマエだけな
んやで、和葉」

足元に転がつとる荷物に手を伸ばそうとしたオレの後ろで、かちや
ん、と鍵の外れる音が響いた。

第二十一話　― 平次 ― (後書き)

「1が出たらあがり」

今回よく喋ってます、服部。

まあ、こんな場所で異常体験した後だしね（笑）。

「別のオンナにキスしたて、人形やろ！……1回はオマエの指示や
ったんやし、平手は1発な」

b y 月姫

第二十二話　― 和葉 ―

平次の指があたしの腕に食込んでる。

これはきつと平次の気持ち。

”絶対に離さへん”とか”何が何でも助けたる”って想いが込められてる。

分かってる。

平次の気持ちは痛いくらいに伝わって来るんやから。

やけど・・・。

平次はあたしの腕をきつく掴んだまま、階段を下りていく。

こんな状況なのに、ゆっくりと。

あたしは俯いてるのに、意識が足元に行ってへんのを分かってくれるからや。

「オレを待つとるワケやないし生きとるワケでもないオンナのために危ない橋渡る気なん、さらさらない。オマエが傍に居るんなら尚更や」

平次の言うことは当然や。

やけど、背中に感じる縋るような視線をどうしたらええん・・・。

「オレが何もかも投げ捨ててでも護りたいと思うんはオマエだけなんやで、和葉」

めっちゃ嬉しいはずの言葉なのに、素直に喜べへんあたしは贅沢者

やねん。

平次がこんな言うてくれるなん、普段やったら考えらへんくらい
凄いコトなんに。

彼女らの視線が痛くて・・・胸が苦しい。

ほんの僅かな間やったけど、同じ気持ちを味わったから。

「和葉！！ちょう離れとけ！！」

怒鳴り声に我に返ると、平次が足元にあったバッグをステンドガラス叩き付けとるところやった。

ガシャ————ン。

バッグが当たった部分のガラスが派手な音を立てて割れた。

ザ————。

ガラスの音が終わると、雨の音が聞こえてきた。

キィ————。

すべての音が現実離れして聞こえる。

これは・・・何の音・・・。

あたしは何も考えずに、音がする方へ振り向いてしもた。

「・・・・・・・・っ！」

声すら出えへん。

「何してんねん和葉！！」

平次があたしの腕を力任せに引っ張ったせいで、あたしはそのまま後ろに倒れ込んでしまった。

「しっかりせいっ!!」

平次の両腕に支えられる格好で、辛うじて立ってる感じや。

「ポケットとすんなっ!!」

「ごっ・ごめん」

声が震えてまう。

お札は言えても、目えは前におけるバケモンから剥がされへん。

洞窟に居る時は周りに比べるモンもなかったし、薄暗うて全体が見えへんかったけど、今は違う。

階段の後ろから白い首擡げてこっちを見てる姿は、デカ過ぎや。

一度消え掛けた恐怖が再度体ん中を支配してまう。

「和葉!! あそこん隙間から早逃げ!!」

平次があたしの体を引き摺るように、割れたステンドグラスん近くまで連れてってくれた。

あたしは恐さで体が上手く動いてへんから。

「平次は？」

「オレも後からすぐ行く。とくかくお前が先や!」

平次は再びあたしを背中に隠すようにすると、後ろ手であたしを強く押した。

差し込んで来る雨があたしと平次を濡らしていくけど、

「嫌や! 平次が先に行って!」

広い背中に縋り付いて訴える。

バケモンに追いつかれてしまったのは、あたしのせいやから。

あたしが人形の彼女らのことを気にしてしもたばかりに、平次をまた危険な状態に追い込んでしもたから。

「和葉！！お前はさっさと行け！」

「やって・・・」

反論しようとした口は、いきなり振り返った平次に塞がれてしもた。
「和葉にやったらなんぼでもキスしたる。和葉やったらどんなこと
してでも助けたる」

「平次・・・」

「やから今はオレの言うことを聞け！」

「・・・・・・・・うん」

言葉はキツイけど優しい目した平次に、もう、あたしは頷くことし
か出来へん。

雨が涙を隠してくれて良かった。

今の平次に泣き顔なん見せれへん。

「平次も絶対来てや！」

「おう！外で待っとけ！」

あたしは一番大きな隙間に体を振じ込んだ。

ガラスの破片でいくつも傷が出来たけど、そんなん今は気にするこ
ととちゃう。

激しい雨の音に混じって、背中ん方からバキバキツちゅう物が壊れ
る音が響いて来る。

早出な！

あたしは力任せに窓の縁を蹴り飛ばして、頭から真っ黒な地面に転
がり落ちた。

次は平次や！

「平次！！」

水浸しで滑る地面に足を取られながらやけど、すぐに立ち上がって
部屋ん中を振り返った。

「あっ・・・」

バケモンは階段の横に大きくとぐろを巻いて、今にも平次に襲い掛かりそうやったんや。

「平次！！早う来て！！平次！！」

バケモンは擡げてる首をゆっくりと後ろに引いとる。
あれは、蛇が獲物に飛び掛る前にやる動きや。

「平次！！平次！！」

平次は少しずつ後ず去る格好で窓に近付いて来る。
後もう少しや！

第三十二話　― 和葉 ― (後書き)

「4がでたら1戻る」

うっ。和葉が……。服部が……。

決して和葉のせいではない。はい。悪いのは……。です。(笑)

「そうやなあ。やったら、お嬢の遊び相手で許したるわ。がんばりや平次。」

b
y
p
h
a
n
t
o
m

第二十三話 | 平次 |

外に出ようとしとる和葉を隠すように、部屋に向き直った。

邸の奥、薄暗い階段の横からオレを見下ろすように鎌首を擡げている白蛇。

色素のないアルビノの蛇は、時折現れる。

信じられんほどデカイ蛇も、世界にはおる。

せやけど、今オレの目の前におるんは、そんな生易しいモンやない。白蛇は神様のお使いやてされとる所もあるけど、それとは全く異質の禍々しさを纏った、全体を想像する事すら出来ん程の圧倒的な存在感を持った、大蛇。

オレが今まで蓄えてきた知識や経験では説明出来ん非現実的な光景に、思考が止まった。

「平次!!! 早う来て!!! 平次!!!」

降つとるハズの雨音すら聞こえんようになったオレの耳に飛び込んで来た、焦ったような和葉の叫び声。

はっと我に返った時には、白蛇は攻撃の意志を見せ付けるようにゆらりと首を引いとった。

「平次!!! 平次!!!」

窓の外から聞こえる和葉の声と雨の音。

まるで唾うように紅い瞳を細める白蛇。

どっちもがオレの目と耳が感じとる『現実』やけど、オレが帰りたい

い世界は窓の外にある。

白蛇を睨みつけたまま、じりじりと後ずさる。

窓までは、約3歩。

オレらをここに閉じ込めた事から察するに、あの白蛇のテリトリーは多分この邸の中だけや。

外にさえ出られれば、追っては来られんやろう。

恐らく、目え逸らした瞬間に襲って来るやろうから、踏み切りに使えるのは精々1歩。

幸い、窓枠は高くないから、1歩あれば十分に飛び出せる。

問題は、さっき叩き割った窓は和葉が出るのがやっくらいの小さな穴しか開いとらんから、とてもやないけどオレには潜れんて事だけや。

せやけど、一度割れたガラスは簡単に碎ける。

勢いは足りんでも、体重かけて突っ込めば何とかなるハズや。

オレの感覚が狂つとらんかったら、窓まではあと1歩半。

振り向きざまに床を蹴って肩から突っ込むには、あと半歩。

その半歩を縮めようと引いた足に、しっかりとした、けれど柔らかいものが当たった。

和葉の荷物。

さっき窓を割るんに使ったオレの荷物はガラスの欠片と一緒に外に放り出されとるから、今ここにあるのは和葉の荷物だけや。

オレのよりも小さいが、それでも充分に使える。

「和葉！！どけっ！！」

白蛇からは目を逸らさんようにしながら、窓のすぐ傍で待っとなるやろう和葉に叫ぶ。

聞こえたかどうかなんわからんが、躊躇っとなるヒマはない。

残りの半歩を一気に縮めながら足元に転がっとなる荷物を拾い上げ、振り向いた勢いのままに窓に向かって投げつける。

その荷物を追うように、低い姿勢から1歩で踏み切って、左肩から窓に突っ込んだ。

第二十三話　― 平次 ― (後書き)

「2が出るまで休み」

お嬢、もしかして手加減してくれてる……？

いやいや、ここはやっぱり真剣勝負だったと言う事をお願いします
(笑)。

「さっさと帰るで、和葉」

b y 月姫

第二十四話　― 和葉 ―

平次が窓に突っ込んで来てからのことは、まるでスローモーションでも見てるようやった。

平次がバケモンに背え向けて、割れた窓に飛び込んで来た。バケモンが大きゅうに口開いて、平次に襲い掛かって来た。もうあかん！って思うて、口から悲鳴が漏れた。

やけど、平次は割れたガラスと一緒にあたしが居る地面に落ちて来た。

バケモンが口に咥えてるんは……。

人形。

ちやう……人間。

彼女らの数人が平次を庇うように、バケモンと平次の間に現れた。あたしにはそう見えたんや。

バケモンは彼女らを咥えると暴れるように首を振り回して、粉々に噛み砕いてしもた。

それやのに……。

白いバケモンは、その後は下を向いたまま動かへんようになってしもた。

「か……ずは……」

あたしは平次に呼ばれて、我に返った。

「しゃきつとせい！行くで！」

平次は落ちていたバックを拾うと、あたしの腕を掴んで走り出した。激しい雨と足元を流れる水のせいで何度も転びそうになるあたしを、平次が力強く助けてくれる。

雨の音とあたしらが走る音。

他には何も聞こえて来いへん。

そやから、あたしは堪らず振り返ってしまふ。

「あ……」

お嬢と呼ばれた白い蛇は、もう割れたガラスの中には居いへんかったんや。

そこに居ったんは、残された数人の彼女らだけやった。表情の無い綺麗な顔があたしらを見送つとる。

「かんにんしてな……」

……あたしはもうあんたらに何もしてあげられへんねん・
……。

「お前があいつらの分まで幸せになったらええ」

前を見据えたままの平次がそう言うた。

「オレは和葉が笑うとったらそれでええ」

「平次……」

あたしはもう一度振り返って、小さくなっていく彼女らを見た。

……ありがとう……
……平次を助けてくれてありがとう……
……。

目に入って来る雨のせいかもしれんけど、あたしの勝手な思い込みかもしれんけど、あたしには彼女らが微笑んでくれたように見えた。

あたしらはそれから真っ暗な闇の中をひたすら走って、街灯がある道路まで辿り着いたんや。

気付けば雨も止んどって、空には綺麗な月が出とった。

2人して肩で息しながら、道路に座り込んでまう。

「大丈夫か？」

「うん。平次は？」

「なんとかな」

平次が唇の端を軽く上げて笑つとる。

「あたしら・・・助かったん？」

「追って来んところを見ると、そうやと思うで」

辺りを見回してもそれらしい気配は無い。

「助かったんや・・・」

「ああ」

口ではそう言うてみるも、やっぱまだ不安やねん。

あんな現実離れたことがあったんや、そうそう安心なん出来へんよ。

「和葉？」

未だに震えの止まらへんあたしを、平次は心配そうに覗き込んで来る。

「痛無いか？」

キャミソールしか着てへんあたしの腕や肩には無数の擦り傷。

平次が触れとる右頬にも微かな痛みを感じる。

顔にも傷があるんや・・・。

気付けば体中が痛い。

「平次かてボロボロやん・・・」

平次もTシャツから出てる腕にはどっちも血いが滲んどるし、ジーンズも破れとる。

「お前も相当酷い格好やで？」

あたしら全身濡れ鼠のヨレヨレのボロボロや。

やからお互いに小さく笑って、

「ありがとな平次」

「和葉もようがんばったな」

唇が触れそうな距離で囁いて・・・。

「あの～」

飛び上がらんばかりに驚いた。

平次はとっさにあたしを抱きしめてくれて、あたしは平次のシャツを握り締めた。

「お忘れ物でございます」

声がする方を見ると、カワエロが平次のバイクを支えて立っとなった。

「お前・・・」

平次が緩めとった警戒心を再び張り巡らすんが分かった。

「あつ。いえっ。もう何も致しませんので、ご安心を」

カワエロも平次に睨まれて、慌てて顔の前で手を振っとる。

この妖怪はやっぱ変や。

「今更そんなんが信用出来るかあ～！」

「ほっ本当にもう何も致しません。お嬢は大層お怒りではございますが・・・」

「ほれみい！」

「でっ・・・ですが、お嬢は館から外に出れません故に、今宵は本にあなた様方の勝ちでございます」

「信用出来ん！」

「本当にございます。お嬢は・・・あなた様はもうご存知と思いますが、光に弱くしかも目が見えません故に館から外に逃げられまずと追うことが出来無いのでございます」

そう・・・なんや・・・。

やからあの時、携帯の音を嫌がったんや。

あたしは漠然と、自分の携帯が粉々に砕かれた時のことを思い出した。

平次はカワエロが言うように、そのことに気付いてたんか特に驚いた様子やない。

「鏡と人形たちがお嬢の目の代わりをしておりましたが、今宵、その人形も数体失ってしまい、残ったモノもお嬢に逆らっておりますので、お嬢は思うように動け無いのでございます」

「・・・・・・・・・・」

あたしは、改めて人形の彼女らに感謝した。

バケモンが最後になんで、直ぐに襲って来んかったか分かったからや。

彼女たちがあたしらをバケモンから隠してくれてたんや、あたしらの居るところを教えんでいてくれたんやって。

・・・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・・・ほんまにほんまにありがとうで・・・・・・・・・・あたし絶対にあんたらこと忘れたりせえへんから・・・・・・・・・・。

あたしが感慨深く想うとるのに、

「ほんで、お前はわざわざバイク届けにきたんか？」

あたしと違って平次にはまったく感情が無いみたいや。むしろ怒りがぶり返しとる。

「・・・・・・・・・・。もう一つお願いがございます」

「お願いやとお?!！」

「はい。どうしてもこれだけは聞き届けて頂きたくて参りました」

「オレらこんなめえに合わしといて今さら何ぬかしとんじゃ!!」

「もちろんタダでは申しません。お礼の品も持参してございます」

カワエロはどこからか日本史の教科書に載ってそうな太古の鏡を取り出したんや。

しかも、それをあたしの目の前に差し出して、

「どうぞ、お手に取ってご覧下さい」
言うてるし。

あたしは思わず、平次が止めるんも聞かずそれを持って鏡になつてる方を覗き込んでしもた。

「・・・・・・・・・・？」

別に何も無い・・・・・・・・けど？

訳が分からないあたしにカワエロが、

「それはお嬢の持つ邪眼の一つ”邪魅の眼”でございます」
なん言うてるし。

さっぱり分からへん。

そう思うて平次の方を向くと、

「かつ・・・・・・・・かず・・・・は・・・・・・・・そっ・・・・その・・・・・・」

何か知らんけどいきなり狼狽え出してしもた。

益々、意味分からへん。

何なん？

「これからあなた様はその鏡を覗くことによって邪魅の眼を得られ、殿方をお好きな様に操れるのでございます」

「はあ？」

さっぱり？やわ。

どうしたらええんか困ってしもて、平次に縋ったら、平次は数歩後退ってまうし。

何や顔紅いし、目え泳いどるし。

「確かにお受け取り頂ました故、わたくしの願いも聞き届けて頂きます」

あたしが進むと平次が後退く。

「お嬢は暫らくお休みになられます故、この地のことは他言無用にてお願い致します。しかと申し付けましたぞ」

1歩進むと2歩下がる。

面白いやん。

「では、これにて失礼致しまする」

その声にカワエロが居った方を向いたけど、もうその姿はどこにもなかった。

「ちよう待てっ！！こらっ！エロガッパ！！和葉を元に戻さんかいっ！！」

平次は必死でその方向に叫んどる。

やっぱあたしどっか変になったんやわ。

面白がっとなる場合ちゃうやん。

「なあ平次！あたしどこが変なん？！」

平次を捕まえて下から上目使いに必死で聞いてみる。

やって変やったら平次に嫌われてまうやんかあ。

そんなん絶対嫌や！

「平次！はつきり言うてや！」

「うっ・・・」

あたしがこんななお願いしてるんに、平次は何でか一瞬絶句して、

「おっ・・・お前は暫らく目え瞑っとれ！」

言うてきつく頭を抱え込まれてしもた。

しかも、

「それでのうても無意味にデカイ目えで困っとるっちゅうのに・・・

・それがさらにパワーアップしてどないすんねん・・・

・」

なんブツブツ言うて離してくれへん。

「このままやったら他ん男に．．．だあゝあかん！絶対にあかんでえ！それだけは断じてあかん！！」

「へ．．．平次い？」

「和葉！お前は今日から外出禁止や！」

「ふえ？」

「オレの部屋から1歩も出るな！絶対出るな！家にも帰るな！学校も行くな！」

「．．．．．」

あたしやっぱどっかほんまに変なんや．．．。

「お前はオレのや。誰にもやらん」

やけど．．．平次が力いっぱい抱きしめてくれるんやったら．．．
．．．それでもええかも．．．。

やって、恐い想いも、辛い想いも、切ない想いも、悲しい想いも、
ぎょうさんしたけど．．．。

平次が居ってくれるから。

平次があたしのことを抱きしめてくれるから。

ええねん。

あの不思議な館は闇に隠されてしもたんか、雨の上がった今、月明かりの中に再びその姿を見ることは出来へんかった。

第二十四話　― 和葉 ―（後書き）

「ゴ~~~~ル!!」

がんばってゴールした人にはご褒美が贈られます。

そこで和葉ちゃんがその栄えあるお品を貰いました。

まあ・・・妖怪と人間では価値観に相違があったようですが・・・

（笑）

和葉ちゃんが貰った商品は第五話を参照して下さい。

あの瞳です。ふふ。これから服部はどうするんでしょうねえ？
監禁

か？隔離か？（笑）

何は共あれ、これにて「雨隠の館」は終了です。

最後の1文は、2人で考えました。最後の最後まで、共同作業！

みなさま、長らくのお付き合いありがとうございました。

「ほな、帰ろ。……………って言うてるそばから押し倒す
な~~~~!!」

by phantom

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9940c/>

「雨隠の館」

2010年10月17日18時42分発行